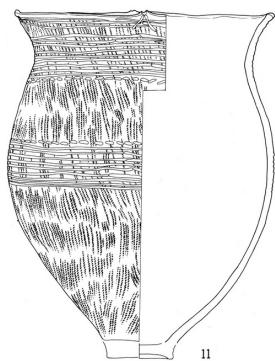


第42回

南北海道考古学情報交換会

発表資料集



令和3年12月4日（土）
於 せたな町生涯学習センター

第Ⅰ部
情報交換 1

道南日本海側の続縄文文化を学ぶ
～南川遺跡出土の遺物から～

yubeot 時代の概説（続）

— yaunmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭から弥生時代中期の土器様式 —

佐藤 剛 ((公財) 北海道埋蔵文化財センター 和人の研究者)

2021年12月4日

1 はじめに

本講演では、当該地域について、Ainu 民族が先住民族であることから、引用と固有名詞を除き、yaunmosir(田村すず子 1996、【名】[ya-un-mosir 陸・の・国] 北海道。方言：沙流。E: refers to Hokkaido. (テープ)。ヤウンモシリ。) 島及び周辺諸島（以下、yaunmosir 島）を用いる（佐藤 2020a・2021）（註 1）。また、「縄縄文文化」と「縄縄文時代」については、「yubeot (ユベオッ・縄縄文) 文化」と「yubeot 時代」とする（佐藤 2021）。これらのことから「縄縄文土器」などの「縄縄文」については、「yubeot (ユベオッ・縄縄文)」とし、「yubeot 土器」などとする。また、これらのように筆者の力量による可能な範囲において、Ainu 語での表記に努めることとする。

私は昨年に予定されていた本会の講演を今年の 2 月に行い、yubeot 文化・時代について概説した（佐藤剛 2021）。そこでは、概説を通して、yubeot 文化・時代の枠組みについて、高瀬克範氏が示した考古学的な文化のとらえ方（高瀬 2014）に同意するとともに、主に考古学による土器研究としてのとらえ方、歴史学による現代的な課題としてのとらえ方の 2 つの課題を検討した。その際にいくつかのご意見をいただき、また時間的な制約と私の力量不足により、当該地域の土器群についての課題は検討できなかった。

そのため、今回は引き続き、指摘されたご意見を参考に前稿の補足を行い、主に yaunmosir 島南西部地域の弥生時代中期の土器様式を検討する。なお、先に補足を行うのは、土器群の検討にも関連するところがあるためである。

2 前稿の補足

2.1 文化と時代の枠組みについて

2.1.1 考古学としての文化区分と時代区分

■考古学的な文化区分について 考古学的な文化区分は、yubeot 文化の「考古学的文化（「共存諸型式の常時的組合せ」（チャイルド 1956））」は「縄縄文文化」としての高瀬克範氏の検討（高瀬 2014）があり、大枠で私は同意する。「弥生文化」などについては、それぞれ内容も時期も異なる文化（日本列島における「考古学的大文化」（高瀬 2014））と捉えており、それらの意味では yubeot 文化の規定は「考古学的大文化」と考える。ただし、高瀬氏の検討は結論を急いでいるわけではなく、個別の資料については今後の課題によるものが多い。

私の土器群による検討は、高瀬氏の「考古学的大文化」によりつつ、実際の資料をもとに社会のあり方との違いから yubeot 文化を区分した。この文化が弥生文化や古墳文化などと異なる独自の文化であることは、これまでの yaunmosir 島内での各氏の様々な検討によって明らかになってきたものであると考える。このことは土器研究が、「考古学的大文化」においても貢献できる可能性を示したものと考える。この検討はこれま

での各氏による検討とその認識により、土器群から考へて示したものであり、「夜臼式と板付式を通しての、縄文文化と弥生文化の区分と土器群の検討」や「庄内式を土師器とするか弥生土器とするか」などのようにして検討されてきた課題について、「共存諸型式の常時的組合せ」としての遺跡群（遺構・遺物）の理解を通して得られる異なる社会とその文化について、それらの土器群によりどのように考えることができるかを検討した。

■考古学的な時代区分について 私の理解では、考古学はヒトにより遺跡に残されたモノ・コト（遺構と遺物）を通して、その背後にあるヒトを科学する。その理解のための理論的な検討として「考古学的文化」（「共存諸型式の常時的組合せ」（チャイルド 1956））があるのであり、考古学的な文化のとらえ方はこれまでにも多くの検討がある。しかし、どのような考え方によったとしても、もともとの「遺跡のあり方からヒトを科学する」こととその倫理を逸脱しない限りにおいては、考古学研究から得られる「考古学的文化」のとらえ方は様々である。実際に行われている、現代の考古学（少なくとも日本の考古学）研究は「モノ・コト」の検討を通して、それを用いたヒトとその文化・社会のあり方を考えている。むしろ、こうした検討がなければ、「考古学的文化」は単なる物の羅列や事実記載にすぎない。そして、それらは所与のものではなく、考古学的な研究から得られる文化・社会としてのあり方が、「考古学的文化」に還元し、付与されることで、私は歴史になる（このような意味において、日本列島における「考古学の大文化」なのだろう）と考える。このことは、私が考古学は歴史学の一員と考える理由である。

私は縄文土器、弥生土器、土師器、飛鳥時代、奈良時代の土器と yubeot 土器を比較し、yubeot 土器を区分した。縄文文化と弥生文化、古墳文化、飛鳥文化など各文化・時代の研究者では、それぞれの文化のなかでのさまざまな議論は深化しているが、それらの文化の境界域での議論については、土器研究を含めてそのすべてが解決し、共有しているように思えない。課題を検討している過程だろう。考古学における、日本列島内の各文化・時代の研究者はその各文化・時代の枠組みを持っていることは自明だろうか。もし、ある程度の枠組みを持っているとするならば、多くの場合にその検討が可能なのは、普遍的に出土（位置的にも、量的にも）する、それぞれの文化の持つ土器群のまとまりの枠組みが、その時々の検討により変化はあるものの研究者間に共有され、大まかには機能しているからであろう。その意味で、「続縄文」について各文化・時代の研究者からそれぞれ個別に指摘してきた点について配慮しつつ検討し、考古学として実際の資料をもとに yubeot 土器による区分を示すことに努め、集落を検討し、それらの検討を踏まえて yubeot 文化・社会の枠組み、それをもって yubeot 時代とする時代区分の枠組みを示したと考える。

当然に、このことは土器のみで文化を捉えることや時代区分することを意味しないし、そのような意図もない。

2.1.2 歴史学としての文化区分と時代区分

歴史学としては、なぜ、当然に、縄文研究を主とした山内清男氏と古墳研究を主とした近藤義郎氏の文化と時代の定義などのみから、yaunmosir 島の文化・時代を検討しなければならないのだろうか。「続縄文式」の枠組みがあるために「続縄文文化」は機能し、「発展段階論」があるために「弥生時代」や「古墳時代」が機能すると考えることのみを強要する場合があるのはなぜだろうか。少なくとも現状の考古学においては、過去に行われた「続縄文式」の検討からの「続縄文文化」の規定と「発展段階論」の検討からの「弥生時代」や「古墳時代」の規定とそれによる歴史叙述により、日本列島における yaunmosir 島の文化と時代の歴史認識とその叙述が、大きく良い方向に変わったようには私は思えない。

そのため、これまでに行われてきた検討を踏まえ、考古学的に、当該期における実際の資料に基づいて、文化を区分し、それをもって時代を区分し、新しい枠組みを示した。山内氏は「縄文式」の文化を設定する際に、実際の資料をもとに古墳文化を詳細に検討し、示したのだろうか。近藤氏は「古墳文化」・「古墳時代」を設定する際に、実際のどの個別の資料をもとに縄文文化を詳細に検討して区分したのだろうか。yubeot 研究側にそれらすべてを求めるることは、公正ではないと考える。

文化の規定について、弥生文化は「灌溉施設のある水稻稻作文化」、古墳文化は「規格性のある巨大な前方後円墳が象徴する文化が古墳文化」と述べて示すとするのであれば、yubeot 文化は「yaunmosir 島で狩猟・漁労・採集を行う遊動的集落社会の文化が yubeot 文化」で十分と考える。そして、それらのまとまりから得られる時代を yaunmosir 島の時代区分とする。このように、yaunmosir 島の各時代は、政治や社会、経済などさまざまなヒト・モノの総体としての時間的な枠組みと理解して区分する。私は、このような時代区分は、先住民族である Ainu 民族の歴史を叙述し、和民族との共生を考えるために必要であると考える。

藤尾慎一郎氏は続縄文文化を弥生文化などとともに弥生時代に位置付ける（藤尾 2015 など）。藤尾氏の議論は「考古学的大文化」とその中にある「考古学的文化」についての検討と理解する。また、「日本の歴史」として汎日本列島における時代の歴史叙述を強調する。藤尾氏の捉えた各文化は、その個別の文化内容と評価についてのいくつかの疑問はあるが、各地域に固有の文化とする多様性については同意する。しかし、文化の歴史的な多様性についての叙述は全くの配慮がないとは言えないものの、歴史・通史を述べながら、その多様性が何を具体的に示すかの叙述がなく、多様性の指摘をもってその歴史的な責任をそのまま他の研究に引き渡しているように見える点があることには同意できない。私は、yubeot 文化は弥生時代を規定する「考古学的大文化」とその中にある「考古学的文化」とは区分し、yubeot 文化は「考古学的大文化」に位置付ける。また、Ainu 民族が yaunmosir 島の先住民族であることとその歴史叙述の必要性について示した。これらのことから、yubeot 文化は弥生時代を規定する文化の枠組みの中にはないと考えるため、yubeot 時代と区分して叙述し、弥生時代に含めて叙述することは出来ないと考えたい。そして、このことは歴史として「分断」を強調するためのものではなく、「共生」のために必要なことだと考える。

これは逆説的に述べているのである、学術的にはそれだけではなく、研究者間での共有によるものがあり、これらのみで課題がすべて解決するものではないことは明らかである。

私は特に現在の細分化した研究分野では、研究者自身の専門ではないところは他の文化・時代の研究によ（拠）っていると考える。yubeot 文化・時代の対象とする範囲は広く、縄文から弥生、古墳、飛鳥、奈良の各文化・時代の範囲にわたる。前稿の概説で示したように、ここ 10 年でも yubeot 文化・時代については、様々な立場から多様な検討がある。そのため、今後はこうしたことを yubeot 文化・時代研究側にのみ求めるることは、公正ではないと考える。

これらの指摘は、同様のあまり建設的ではないと考える問題を避け、今後に繰り返さないためである。

2.2 歴史教育の観点から

Ainu 民族が先住民族である yaunmosir 島の歴史叙述では、yubeot 文化・yubeot 時代を用いて叙述していく必要性を述べた。これは和人の人々の歴史を弥生文化・時代や古墳文化・時代、琉球の人々の歴史を貝塚文化・時代やグスク文化・時代などとすることに「等置して叙述する」ことである。歴史叙述は広く行われることから、その影響は大きい。

特に歴史の教育の場では、文化のまとまりとして縄文文化や弥生文化、古墳文化などが用いられる。時代としてのまとまりは縄文時代や弥生時代などが用いられる。yaunmosir 島の文化と時代のまとまりのとらえ方は検討してきたように、それらとは異なる、独自で固有のものである。そのため、私はこれから Ainu の人々（Ainu 民族）と和人の人々（和民族）の共生を考える立場からは、等置して用いないと、歴史として叙述し、説明することが出来ないと考える。私は、教育は幼いころからなされるため重要であり、そのためには、小児でも理解できるものが必要であると考える。加藤博文・若園雄志郎編（2018）の「まえがき」では、無理としつつも、古代・中世・近世・現代を用いて Ainu 民族の歴史を通史として提示しており、それは高校までの日本史がこの枠組みを用いているためとする。このように、教育の場での歴史叙述には何らかの枠組みが必要であると考える。そのため、私が歴史学の一員と考える考古学においては、これが現状では適していると考える。しかし、他の方法・手法を拒否しているわけではないため、他に適切な方法・手法があれば是非にご教

示をいただきたいし、対話していきたい。

2.3 小結

私がこれらの区分を示したのは、他の文化・時代についての研究と同様に、yubeot 文化・時代についても、その実際の資料をもとにした枠組みがなければ、問題が繰り返されるため研究の進展は難しく、いつまでも課題の検討は深化しないと考えたことによる。また、このような文化・時代の枠組みを示さなければ、多数者としての（しかし、自覚のない透明な）和人を中心とする歴史研究と歴史教育の場において、いつまでも堂々巡りの議論と同じ議論が再生産されるしかなくなることを危惧するためである。

私は yubeot 土器の鈴木信氏と大坂拓氏による一連の検討について、「型式」と「細分型式」による解題を通して、基礎的なところでの研究者間での共有が必要なことについて指摘した。私はこれらの文化・時代の枠組みは共有したいが、文化・時代の内容の詳細は、各研究者で異なって良いと考える。そのため、このような yubeot 文化・時代の区分を示したのは、当然に、島内や本州島の各時代の研究者との対話を拒絶しているのではない。

これらのことから、私はこれまでの検討とその成果の研究者間での共有により、yubeot 文化とその時代について、この yaunnmosir 島の固有の文化・時代とするには十分である、と捉える。このことは、検討する必要がないと述べているわけではなく、高瀬克範氏による検討やこれまでに遺跡の理解から示してきた各氏の叙述により、現状では私は十二分であると考えるし、今後も検討していく必要はある。私の示した yubeot 文化とその時代の枠組みは、縄文文化、弥生文化、古墳文化ではない、それらと等置して叙述する、yaunnmosir 島に固有の独自の社会とその文化、その時代である。私は、これらのことを持ってのみ文化と時代を考えるという意図は全くない（佐藤 2021：27 頁など）。そして、この検討が十分でなければ、その課題についてそれぞれの立場から検討し、対話を続けていきたい。

そのため、現状での歴史の叙述はそれぞれの文化により規定する時代区分名を用いて行うことが公正（佐藤 2020a・2021）と考える。

3 yaunnmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭から II 期併行期の各型式及び土器群について

3.1 各型式及び土器群の地域と時期の位置付け（第 1 図）

型式論として、島南西部地域の yubeot 時代初頭から弥生時代中期の資料については、近年では大坂拓氏による一連の検討がある（大坂 2007・2010・2011・2013・2015）。また、関連する本州島東北部地域での当該期の土器研究は盛んであり、斎野（2011）や佐藤祐輔（2015）などの多くの検討がある。

島南西部地域における当該期の土器群は、尾白内 II 群（千代・石本 1981）（尾白内遺跡出土 II 群土器群など）、下添山式（吉崎 1982）（下添山式土器群）、恵山式（名取 1960）（恵山式土器群）である。筆者の検討（佐藤 2021）では、大坂拓氏（2007・2015）と斎野裕彦氏（2011）により、尾白内 II 群は yubeot 土器（yubeot 文化的土器）であり、弥生時代前期末葉の砂沢式併行期にあたる yubeot 時代初頭、下添山式土器群は弥生土器（弥生文化の土器）で弥生時代中期前葉の二枚橋式に併行する土器群である。恵山式土器群は弥生土器（同）で、恵山 II 式（大坂 2007）が弥生時代中期後葉主体に位置付けられ（佐藤 2020b）、そのことから恵山 I 式（大坂 2007）は中期中葉主体に位置付けることができる。

3.2 各型式及び土器群の遺跡でのあり方

3.2.1 尾白内II群（森町尾白内遺跡II群土器群など）

尾白内II群は当該地域に分布し、型式に類似するものと考える yubeot 時代初頭の土器群（佐藤 2011・2014）に併行する土器群である。桧山地域では兜野式が設定されているが、現状では地域的な相違は明らかになっていない。

大坂氏（2015）は、砂沢式とその併行期について「砂沢式古段階（梨ノ木平段階）に並行する資料は道南では出土しておらず、新段階（戸沢川代段階）に相当する資料も国立療養所裏遺跡（石本編 2000）で僅かに出土するのみ」で、「主体を占めるのは道央部と共通性の高い「尾白内II群」（千代・石川 1981）」とする。

3.2.2 下添山式（北斗市下添山遺跡出土土器群など）

下添山式は当該地域に分布する、弥生時代中期前葉を主体とする二枚橋式・宇鉄II式（斎野 2011）に併行する土器群である。

大坂氏（2015）は、二枚橋式は「先行する砂沢式に比べて変形工字文を構成する沈線が多条化すること、台付浅鉢の台部が曲線的な鐘形に変化することなど」により、「津軽・下北半島の砂沢式から連続的な変遷を跡づけることが可能」で、「北海道の噴火湾沿岸の豊浦町礼文華遺跡（松田・青野 2003）や伊達市南有珠7遺跡（などで多量に出土する」とする。また、下添山遺跡出土土器群については、大坂氏（大坂 2007・2015）は恵山Ia式に含め、二枚橋式は二枚橋遺跡出土土器に限定する。また、大坂氏（2010）では、津軽平野南部地域では砂沢式に後続するものとして、五所式、垂柳1式、垂柳1式、垂柳2式、垂柳3式の型式変遷を認める。五所式および垂柳1式が二枚橋式と、垂柳2式が恵山Ia式と、垂柳3式が恵山Ib1式とそれぞれ並行関係にあるとする（大坂 2010）。

私は大坂氏の検討（大坂 2007・2010・2015）について、恵山式のなかに、二枚橋式に後続する土器群として下添山式を含めることには賛同できない。下添山式は当該地域の二枚橋式併行の土器群として設定されているものであり、遺跡から出土するまとまりのある土器群として型式を認識している。その立場からは、大坂氏の検討は自身の設定する「細分型式」（佐藤 2020b）の検討のためのものであることから、それを理由として「型式」をまとめることには同意できない。型式は遺跡層位的に出土したものを分類したもので、斎野氏（2011）による広域的な編年などのように、研究者間での共有のために必要なものである。その枠組みを越えて土器群の系統性を検討し、対比することとは、別の問題として扱う必要があると考える。型式を扱う場合には前後左右の型式も尊重することであり、文様などの系統性から型式をまとめ際にはこのような配慮が必要であろう。

大坂氏による当該期の土器群における系統性の検討は理解するため、型式の理解の相違と捉える。

3.2.3 恵山式（茂別遺跡出土土器群、南川遺跡出土土器群など）

恵山式は当該地域に分布する、弥生時代中期中葉の田舎館式（田舎館2・3群）から後葉の大石平VI群2・3類など（斎野 2011）に併行する土器群である。当該地域では茂別遺跡出土土器群、南川遺跡出土土器群などのように、各遺跡からまとまりをもって、時期差を伴い出土する土器群である。筆者の力量により、竪穴住居の変遷のみを確認する。

茂別遺跡では、工藤研治氏によれば、遺物包含層から出土した二枚橋式の壺型土器とごく少量の後北C1式を除きほとんどの続縄文土器が恵山式（VI群B類）である。各遺構及び包含層出土の資料については、「現時点では西桔梗B2遺跡の資料（千代編 1984）の段階から大中山5遺跡の資料（七飯町教育委員会 1983）の段階にかけてのもの」とした（工藤 1998）。竪穴住居では、立田理氏の検討により、H-2の堀上げ土の観察から、H-3（一番古い）とH-2（古い）、H-4（新しい）の前後関係が得られている（立田 1998）。

南川遺跡では、高橋和樹氏によれば、恵山B式（峰山 1968、中村五郎 1973）に相当する南川III群と恵山A B式（中村 1973）に相当する南川IV群の土器群が認識されている（高橋 1976）。竪穴住居では、田部淳・加藤邦夫両氏によれば、I期の南川III群土器を主体に出土する第1・2・4・6・12・14・(15)号竪穴住居跡とII期の南川IV群土器を主体に出土する第16・19・20・22号竪穴住居跡の時期差がある。さらに、I期は乳白色火山灰の竪穴窓地での確認状況から、落ち込みが確認できたIA期の第1・13・14・(15)号竪穴住居跡と確認できなかったIB期の第2・4・6・12・17号竪穴住居跡に細分している（田部・加藤 1983）。

恵山式の変遷については、これまでの検討により茂別遺跡出土土器群から南川III群土器群、南川IV群土器群への変遷が共有されている（大坂 2015 など）。そのため、本稿では前項の検討により、遺跡ごとのまとまりである茂別期（茂別遺跡の時期）、南川III群期（瀬棚南川遺跡III群土器群の時期）、南川IV群期（瀬棚南川遺跡IV群土器群の時期）に大きく区分する。さらに各遺跡で得られた遺構と遺構群の新旧により、茂別期はH-3期、H-2期、H-4期とする。南川III群期はIA期（第1・13・14・(15)号竪穴住居跡出土土器群）、IB期（第2・4・6・12・17号竪穴住居跡出土土器群）、南川IV群はII期（第16・19・20・22号竪穴住居跡）と細分する。

4 yaunnmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭から II 期併行期の土器群の細分について

4.1 各型式及び土器群の細分

各型式及び土器群は、前項で検討した竪穴住居の床面・床面直上・生活面・覆土下部出土資料について、辻秀人氏の細別器種と様式の理解（辻 2005）により検討する。時期区分は遺跡ごとのまとまり（茂別期、南川III群期、南川IV群期）で検討する。

なお、尾白内II群については前稿（佐藤 2021）でも指摘したように、yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）と考えられることから、別の様式であることは明らかにため、大まかに対比する。

4.1.1 甕（第2～5・9図）

法量により、器高45cm前後以上の特大型、45～25cm程度の大型、25～15cm程度の中型、15cm前後以下の小型がある。しかし、厳密な区分を行ったわけではない。

■1) 甕 A 中型から大型で、上げ底のものが多い小さめの底部からやや直線的に立ち上がり、肩部は強く丸みを帯びて内湾し、そこから直線的に立ち上がる頸部をもつもの。いわゆる長頸甕（須藤隆 1970）の一種。頸部がほぼ垂直に立ち上がるA1と外反もしくは外傾するA2がある。また、島南西部では確認できないが、yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）の2期には内傾するもの（甕Bとしたもの：第2図）があることからA3とする。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式南川III群期）まで確認できる。

■甕 B 中型から大型で、上げ底のものが多い小さめの底部からやや直線的に立ち上がり、胴部上半にある肩部は丸みを帯び、そこから胴部上半は直線的に内傾し、口縁部は「くの字」に外傾するもの。肩部と胴部上半の境は粘土紐の接合と一致する場合が多く、そのため段状になるものが多い。いわゆる長頸甕の一種であるが、今回の検討により、恵山式に出現すると考えられる。

二段階（恵山式茂別期）から同（恵山式南川III群期）まで確認できる。

■甕 C 中型から大型で、上げ底のものが多い小さめの底部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、砲弾型の胴部で、肩部は丸みを帯びて内湾し、口縁部は「くの字」に外傾するもの。いわゆる「くの字」甕。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階

(下添山式期) から三段階 (恵山式南川IV群期) まで確認できる。

■甕 D (小型甕) 甕 B (長頸甕) を小型にした相似形のもの。

二段階 (茂別期) から同 (南川III群期) まで確認できる。

■甕 E (小型甕) 甕 C (くの字甕) を小型にした相似形のもの。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階 (下添山式期) から三段階 (恵山式南川IV群期) まで確認できる。

■甕 F (特大型甕) 甕 B (長頸甕) を特大型にした相似形のもの。

二段階 (恵山式南川III群期) で確認できる。

4.1.2 深鉢 (第5・9図)

法量により、器高45cm前後以上の特大型、45~25cm程度の大型、25~15cm程度の中型、15cm前後以下の小型がある。しかし、厳密な区分を行ったわけではない。

今回の検討により深鉢を確認した。中部地域の江別太式や軽川式にみられる在地に系譜のある深鉢を、島南西部地域で製作したものと考える。

■深鉢 A 小型で、上げ底の底部から直立気味に立ち上がり、体部は上半から内湾気味にやや丸みを帯びながら口縁部に向かって開く、倒鐘形である。

三段階 (恵山式南川IV群期) で確認できる。

4.1.3 浅鉢 (第6・9図)

■浅鉢 A 丸底気味の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部はそのまま開き、口縁部は短く強く外傾して開くものとそのまま立ち上がるものがある。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階 (下添山式期) から二段階 (恵山式茂別期) まで確認できる。

■浅鉢 B 平底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みがあり、口縁部はそのまま内湾するもの。

一段階 (下添山式期) から二段階 (恵山式茂別期) まで確認できる。

4.1.4 鉢 (第6・9図)

■鉢 A 丸底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みをもって内湾し、口縁部はくの字に短く外傾して開くもの。二段階 (恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 B 平底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みがあり、口縁部はそのまま内湾するもの。二段階 (恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 C 甕類を寸胴にしたもの。

二段階 (恵山式南川III群期) で確認できる。

■鉢 D やや幅広の山形の一つ突起をもつもの。島中部地域や島東北部の深鉢または鉢類の細別器種の影響を受けている可能性があるもの。

二段階 (恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 E } 大型で、平底の底部からやや直線的に立ち上がり、胴部は胴部は丸みをもって内湾し、口縁部はそこから直線的に外傾して開くもの。口縁部の上部ではさらに直線的に外傾して開くものがある。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式茂別期）まで確認できる。

4.1.5 台付鉢（第7・9図）

■台付鉢 A 低い台部を持つ鉢で、鉢部は大型である鉢 E となるもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

4.1.6 高壺（第7図）

脚部は器高に対して、低めのものでハの字に直線的に開くものと直線状に開いた後屈曲して開くものと高い筒状のもので、そこから屈曲して開くものがある。

■高壺 A 高い脚部を持つもので、壺部は浅鉢 A となるもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■高壺 B 高い脚部を持つもので、壺部は鉢 F を扁平にした浅鉢となるもの。脚は高い筒状のもので、そこから屈曲して開く。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式茂別期）で確認できる。

4.1.7 壺（第8図）

豊穴住居出土資料を対象としたため、土坑墓などから出土することの多い壺類は検討できた資料が少ない。今後の課題である。

■壺 A 中型から大型で、丸みを持った胴部から頸部は短く直立し、口縁部は外形して開くもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■壺 B 小型で、壺 A の相似形のもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■壺 C 大型で、平底の底部からあまり広がらずに立ち上がり、胴部はあまり張らない長胴で、頸部はあまり締まらずに、口縁部はくの字に外傾して開くもの

二段階（恵山式茂別期）で確認できる。

4.1.8 ミニチュア土器（第8・9図）

鉢・浅鉢・甕形のものがある。

二段階（恵山式茂別期）から同（南川IV群期）で確認できる。

4.1.9 様式

前項までの検討により当該期の細別器種の集合体は、甕 A1・A2・B・C・D・E・F、深鉢 A、浅鉢 A・B、鉢 A・B・C・D・E・F、台付鉢 A、高壺 A・B、壺 A・B、ミニチュア土器の構成となる。主要な細別器種は、甕 A・B・C、浅鉢類、鉢類、高壺類である。

この土器群に一部で併行する中部地域の yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）では深鉢 A～F、甕 A・B、広口壺 A・B、鉢 A～I、台付鉢 A、壺 A の構成であり、主要な細別器種は深鉢類と鉢である。

このように、島南西部地域における当該期の土器群の細別器種の構成は中部地域の yubeot 時代初頭土器群様式と細別器種はごく一部では共通するものの、主要な細別器種の構成はほとんどが異なっている。そのため、このような細別器種の構成を yaunnmosir 島南西部地域弥生時代中期土器群様式と捉える。

なお、各遺跡の豊穴住居出土資料を対象としたため、特に土坑墓などから出土することの多い壺類などで検

討できた資料が少ない。また、様式の中半以降で併行すると考える中部地域の江別太式・軽川式土器群との比較は出来なかった。今後の課題である。

4.2 yaunnmosir 島南西部地域弥生時代中期土器群様式の各段階（第9図）

4.2.1 一段階（中期前葉）

一段階は下添山式期である。中期前葉の二枚橋式・宇鉄II式（斎野 2011）併行期である。甕 A1・A2 の長頸甕が成立し、東北地域北部とも斉一性が高い土器群である。

■下添山式期 下添山式期は下添山遺跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 A1・A2・C・E、浅鉢 A・B、鉢 E、台付鉢 A、高壺 A・B、壺 A・B の構成である。

4.2.2 二段階（中期中葉主体）

二段階は恵山式茂別期から南川III群期である。甕 B の長頸甕が成立する、恵山式の成立期。

■恵山式茂別期 恵山式茂別期は茂別遺跡 H-2・H-3・H-4・H-9 出土資料を基準とする。

なお、H-9 については、出土している甕 A2 の頸部の無文帯が幅の狭いもので、高壺の脚部は器高に対して低めでハの字に直線的に開くものため、吉い様相と考え、H-3・9 期として位置付ける。

細別器種は甕 A1・A2・B・C・D・E、浅鉢 A・B・C、鉢 A・B・D・E、高壺 B、壺 C、ミニチュア土器の構成である。

■恵山式南川3群期 恵山式南川III群期は瀬棚南川遺跡第1・2・4・6・13号竪穴住居跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 A1・A2・B・C・D・E・F、鉢 C、ミニチュア土器の構成である。

4.2.3 III期（中期後葉主体）

III期は恵山式南川IV群期である。甕類は甕 C・E は存続するが、甕 A1・A2・B が存続しない。ほかの細別器種数が減少している。中部地域の深鉢の細別器種と考える倒鐘形の深鉢 A がみられる。

■恵山式南川4群期 3 恵山式南川IV群期は瀬棚南川遺跡第19・20・22号竪穴住居跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 C・E、深鉢 A、鉢 C、ミニチュア土器の構成である。

4.3 各段階の甕類における主要な文様の施文位置の変化と無文帯の有無

甕 B は恵山式の成立である二段階（恵山式茂別期）に出現する主要な細別器種である。その主要な文様帯は、口縁部下端から胴部上半の段までであり、一段階（下添山式期）の甕 A の頸部にみられた文様帯と共に通する。文様帯は無文になるものと自文に縄文をもつもの、多重の沈線文による文様をもつものがある。

甕 C の主要な文様帯は、二段階（恵山式南川III群期）から口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半になり、二段階（恵山式茂別期）まで甕 B の口縁部下端から胴部上半の段までにみられた文様帯と共に通する。三段階（恵山式南川IV群期）から、口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半に沈線区画の帶状縄文による文様をもつものが出現している。

大坂氏（2015）が恵山I式と恵山II式の区分で大きな基準とする甕の無文帯は、本稿ではII期以降に消失すると考えられる。

4.4 いくつかの課題についての共有

4.4.1 遠賀川系土器について

遠賀川系土器については斎野裕彦氏（2011）による整理がある。佐藤由紀男氏（佐藤 2003）によれば国立療養所裏遺跡から類遠賀川系土器の鉢形土器が出土している。その特徴を引用すると、「口辺部のヨコナデ調整（佐藤 2002）が明瞭であり、沈線間にはハケ目かと思われる調整痕も認められる。」とする。

佐藤由紀男氏も指摘しているように、恵山式には口辺部のヨコナデ調整やハケ目はあまり顕著ではない。当該期の東北地域北部の資料との比較が必要である。

4.4.2 傾斜編年について

佐藤由紀男氏が編者となっている、『弥生土器』（佐藤由紀男編 2015）では地域ごとに様々な研究者が全国の弥生土器を検討している。弥生土器についての網羅的な検討であり、土器研究の上では非常に参考になる。しかし、そこに示された広域編年表では、東相模・南武藏地域と仙台平野以北の地域では弥生中期から後期後半までの型式による編年対比が示されていない。このことは、編者に責があるのでなく、関東地域周辺と東北地域、yaunmosir 島地域での型式の共有がなされていないことが理由と考える。その原因を考えると、関東地域周辺では型式の細分が進んでいるものの、その共有についてはあまり配慮されていないのではないかとも思える。

私自身も弥生時代併行期の広域的な交流について、土器群による検討を目指したことがある。その際には、関東地域周辺の型式を介すると、各研究者がそれぞれ細分しているために型式の対比が難しくなり、段差のついた型式対比しか行えなくなってしまった。このようなことを行うと、傾斜編年になってしまふため、私は断念した。ほかの研究者の方も同じような経験をされた方が多いのではないかと思う。本来はシンポジウムなどで解消され、共有がなされると考えるが、これまでも同様のことが繰り返されてきたのではないだろうか。斎野氏（斎野 2011）による東北地域の土器群の検討は編年表で各地域の型式が対比されており、原則的には型式間での段差はみられない。このことは、厳密には関東地域南西部を介さずに北陸地域と関東地域東部を経由して近畿地域以西との対比を行ったものと考える。

私は研究の多様性は理解するものの、それは研究者間での共有により担保されるものと考える。このようなことは記載するべきことではないのかもしれないが、当該期の土器研究とともに、考古学研究についての本質的な課題と考えるために、提示する。

5 まとめ

本稿では前稿の補足を行い、yaunnmosiri 島南西部地域における弥生時代中期土器群様式を提示した。

これまでの概説は、私の力量の及ぶ範囲内でのものであり、遗漏と誤読が多いことと思う。また、今回の土器群の検討では、時間的な制約もあることから、特に東北地域との対比に必要な近年に増加した資料の実見など、私自身が検討しきれてないものが多い。筆者の力量によるものため、ご容赦頂きたい。様々な立場からの忌憚のないご意見とご教示、今後の検討をいただければ幸いです。

謝辞

昨年に引き続き、二度にわたる講演の機会をいただきました、南北海道考古学情報交換会の事務局に感謝を申し上げます。現在は鬼籍に入られておられる石本省三氏と千代肇先生と、現在も精力的に研究を進めておられる横山英介氏からの学恩に感謝申し上げます。また、これまでの資料の実見などの際にともに検討を行っていただいた諸研究者の方々にも感謝いたします。身に余る思いを感じつつ、十分にその責に応えることが出来

たかは心許ありませんが、現状での私なりの理解を示したこと、その任を終えたいと思います。

註

- 1) 「yaunmosir（ヤウンモシリ・北海道）島」の表記については、北海道大学先住民・アイヌ研究センター北原モコットゥナシ氏のご教示による。記して感謝を申し上げます。

引用文献

- 大坂 拓 2007 「恵山式土器の編年」『駿台史学』第130号 53~83頁
- 大坂 拓 2010 「縄縄文時代前半期土器群と本州島東北弥生土器の並行関係」『北海道考古学』第46輯 89~104頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2011 「後北式土器拡散開始期における集団移動の一様相-日本列島北部弥生古墳移行期の土器型式分布圈変動過程とその背景(1)」『考古学集刊』第7号 39~61頁
- 大坂 拓 2013 「後北式土器再論」『北海道考古学』第49輯 51~68頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2015 「北海道(南部・中央部)」『弥生土器』 447~473頁 佐藤由紀男編 ニュー・サイエンス社
- 加藤博文・若園雄志郎編 2018 「まえがき」「いま学ぶ アイヌ民族の歴史」 I~III頁 山川出版社
- 工藤研治 1998 「VII まとめ 2 土器」『北斗市 茂別遺跡』第121集 625-626頁 (公財)北海道埋蔵文化財センター
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町(現北斗市) 茂別遺跡』第121集
- 斎野裕彦 2011 「第1章 弥生文化の地域的様相と発展 十 東北地域」『講座日本の考古学 弥生時代(上)』5 430~482頁 青木書店
- 佐藤 剛 2011 「縄縄文時代初頭の土器群の時期区分について」『北方島文化研究』第9号 1~14頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2014 「縄縄文時代初頭の土器群の細分について」『北方島文化研究』11号 41~49頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2020a 「接触・緩衝地帯(フロンティア)」(西川2019)について「弥生時代の東西交流~広域的な連動性を考える~」考古学リーダー27 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編 六一書房
- 佐藤 剛 2020b 「縄縄文時代前半期の土器研究の現状について」『糸』10号 弥生時代研究会編
- 佐藤 剛 2021 「ユベオッ(縄縄文)時代の概説」『第41回 南北海道考古学情報交換会講演資料』1~33頁 (<https://ishiijunpei.github.io/dkouko2020/>)
- 佐藤祐輔 2015 「東北」『弥生土器』 397~446頁 佐藤由紀男編 ニュー・サイエンス社
- 佐藤由紀男 2003 「『恵山式土器』『恵山文化』の成立に関する一試論」『立命館大学考古学論集Ⅱ論集』 367~382頁 立命館大学考古学論集刊行会編
- 佐藤由紀男編 2015 『弥生土器』 ニュー・サイエンス社
- 須藤 隆 1970 「青森県大畠町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻第2号 10~65頁 日本考古学会編 学生社
- 瀬棚町(現せたな町)教育委員会 1976 『瀬棚南川遺跡』
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第34輯 21~41頁 北海道考古学会編
- 高瀬克範 2014 「縄縄文文化の資源・土地利用」『農耕社会の成立と展開-弥生時代像の再構築-』 国立歴史民俗博物館研究報告第185集

高橋和樹 1976 「第6章 総括 第2節 土器」『瀬棚南川遺跡』 134~146頁 濑棚町教育委員会

高橋正勝 1984 「北海道中央部の縄繩文文化」『北海道の研究』1 356~384頁 清文堂

高橋正勝 2003 「江別文化の成立と発展」『北海道の古代 縄繩文・オホーツク文化』2 30~49頁 北海道新聞社

立田 理 1998 「VIIまとめ 1 土器 (5) 縄繩文時代の住居跡」『北斗市 茂別遺跡』第121集 620~621頁 (公財) 北海道埋蔵文化財センター

田部 淳・加藤邦夫 「本文編 第4章 遺構 第1節 壁穴住居跡」『瀬棚南川遺跡』 濑棚町(現せたな町) 教育委員会

田村すず子 1996 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館

千代 肇・石本省三 1981 『尾白内-縄繩文遺跡の調査報告-』 森町教育委員会

辻 秀人 2005 「土器研究の方法」『東北学院大学論集-歴史学・地理学-』第39号 1~32頁

中村五郎 1973 「北海道南部の縄繩紋土器編年」『北海道考古学』第9輯 81~99頁 北海道考古学会編

名取武光 1960 「網と釣の覚書」『北方文化研究報告』第15輯 141~205頁 北海道大学北方文化研究室

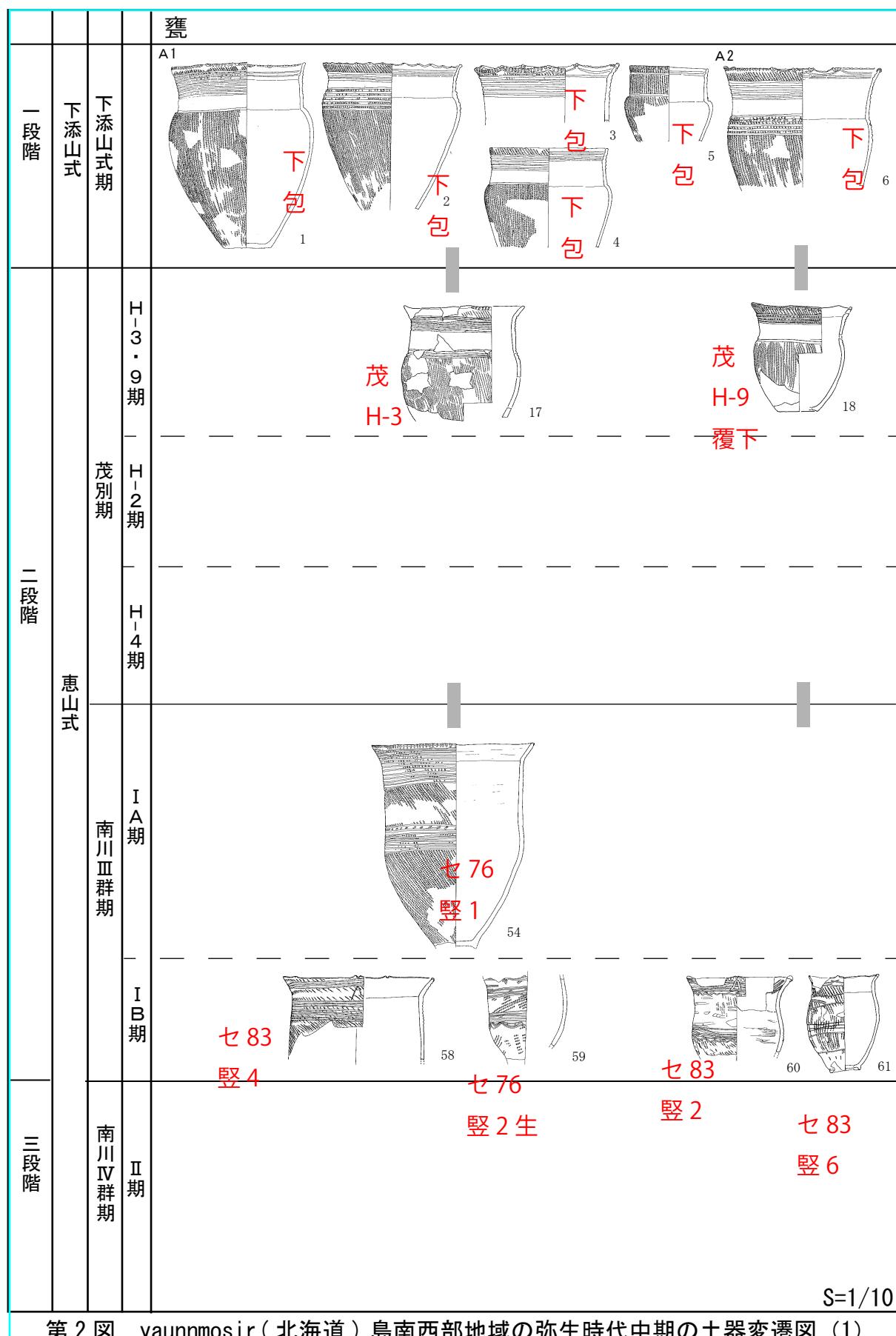
西川修一 2018 「三浦半島と相模湾岸の海洋民系文化について」『研究紀要』第6号 59~69頁 横須賀考古学会編

藤尾慎一郎 2015 『弥生時代の歴史』 講談社現代新書 2330

峰山 巖 1968 「恵山式土器」『北海道考古学』第4輯 49~63頁 北海道考古学会編

吉崎昌一 1982 「5 下添山遺跡」『北海道における農耕の起源(予報)-文部省科学研究費による-』 4~12頁 梅原達治(研究代表者)編

第1図 yubeot (縄縄文) 時代前半期のyaunmosir (北海道) 島と本州島東北部地域の編年対比



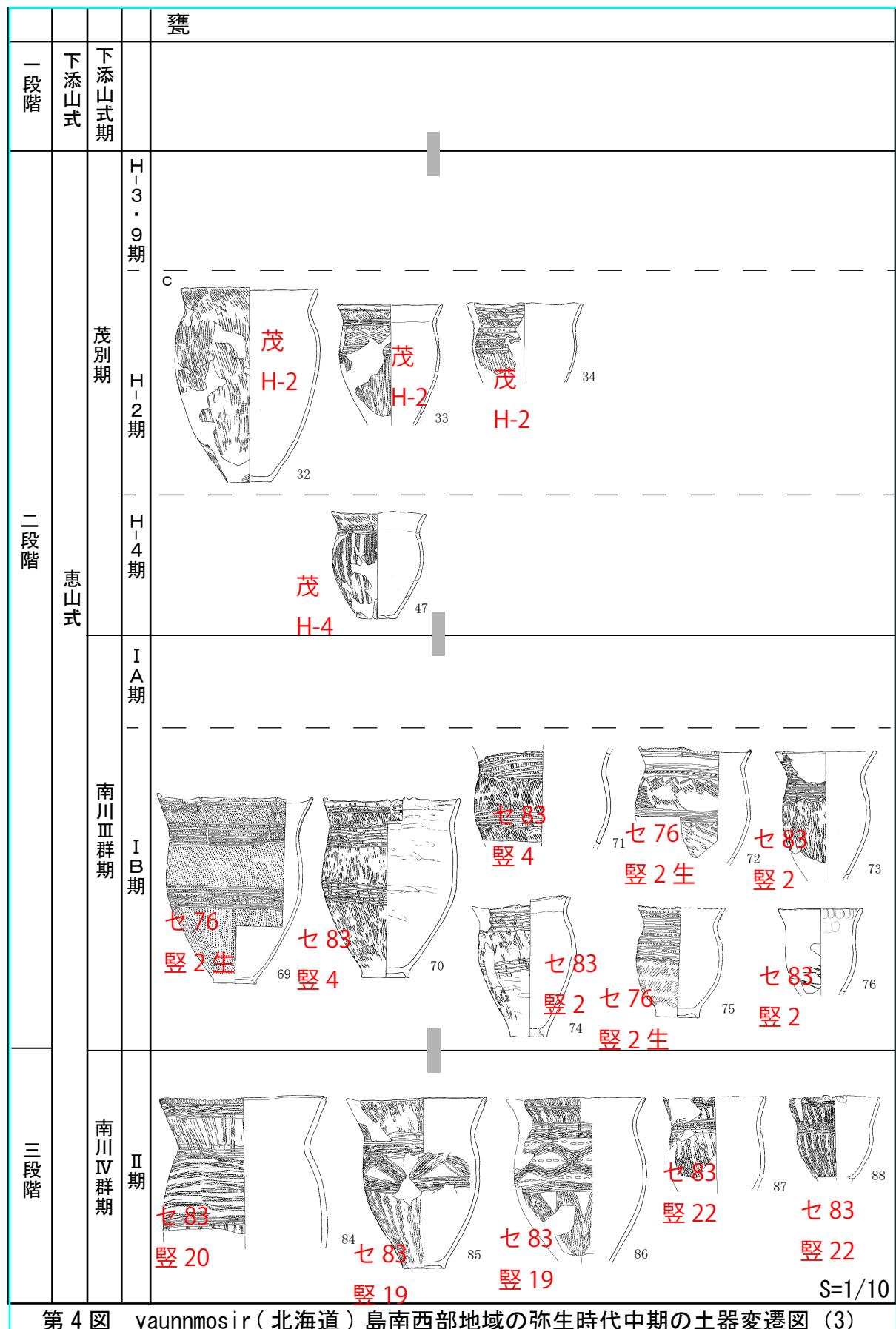
第2図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(1)

甕

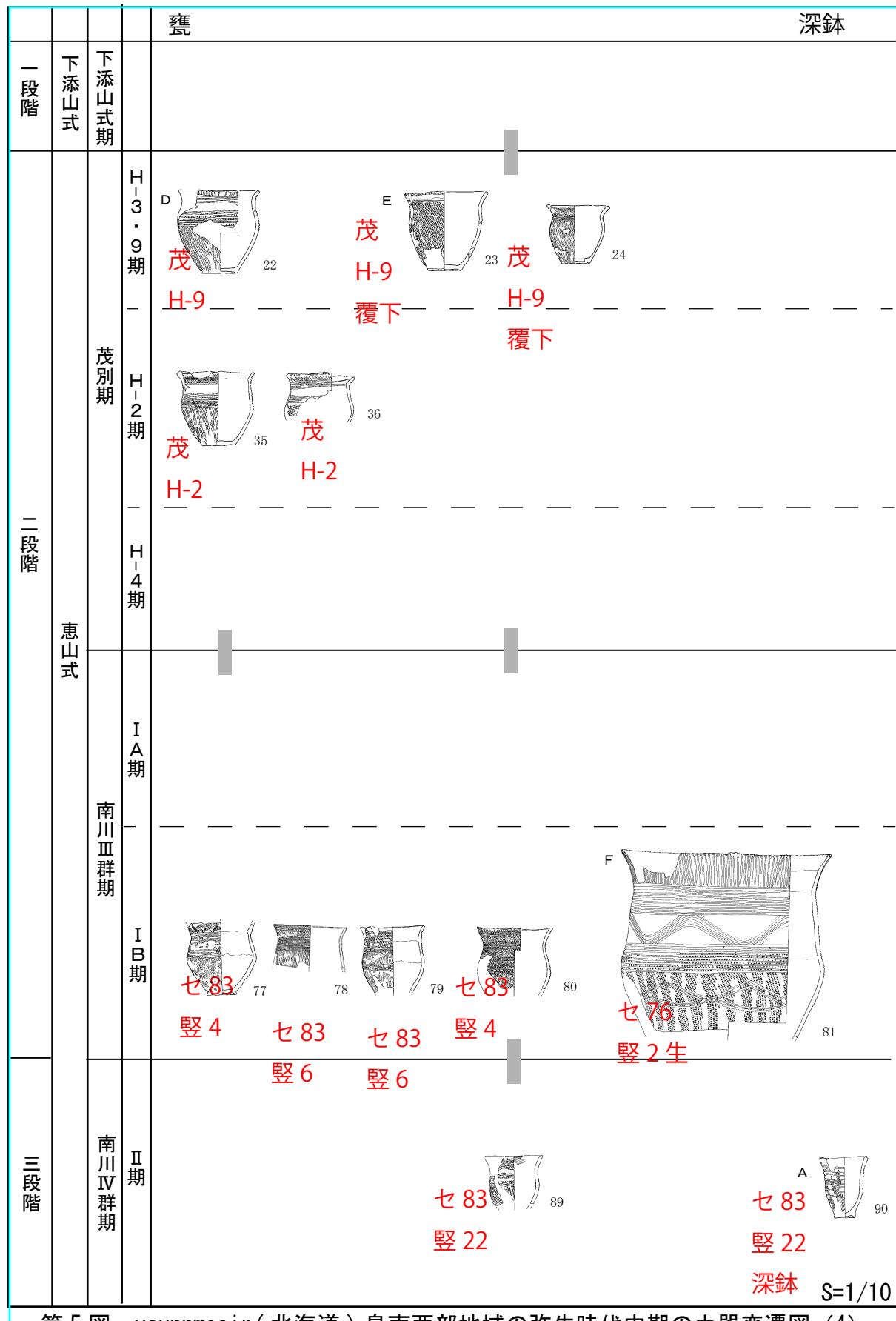
一段階	下添山式 下添山式期		
		B	H-3・9期 茂 H-9 H-9 茂 H-9 茂 H-9 21
		茂別期 H-2期 茂 H-2 H-2 30	
二段階	惠山式	H-4期 茂 H-4 H-4 44	茂 H-4 茂 H-4 45 H-4 46
		I A期 セ 83 豎 13	セ 76 55 豊 1 56
		南川Ⅲ群期 I B期 セ 83 豎 6 62	セ 76 豎 2 63 セ 83 豎 4 64 セ 83 豎 4 65 セ 83 豎 4 66 セ 83 豎 4 67 セ 83 豎 4 68
三段階	南川Ⅳ群期 II期		

The diagram shows the stratigraphic sequence of pottery vessels across three stages. In the first stage (Yamashita-shan Type), there are three periods: H-3・9期 (B), H-2期 (M), and H-4期 (M). In the second stage (Weishan Type), there are two periods: I A期 (セ 83, 豊 13) and I B期 (セ 76, 豊 2, etc.). In the third stage (Nakanakagawa Type), there is one period: II期. Red labels indicate specific vessel types or patterns, such as 'M' for 'Mao' (茂) and 'Se' for 'Se' (セ).

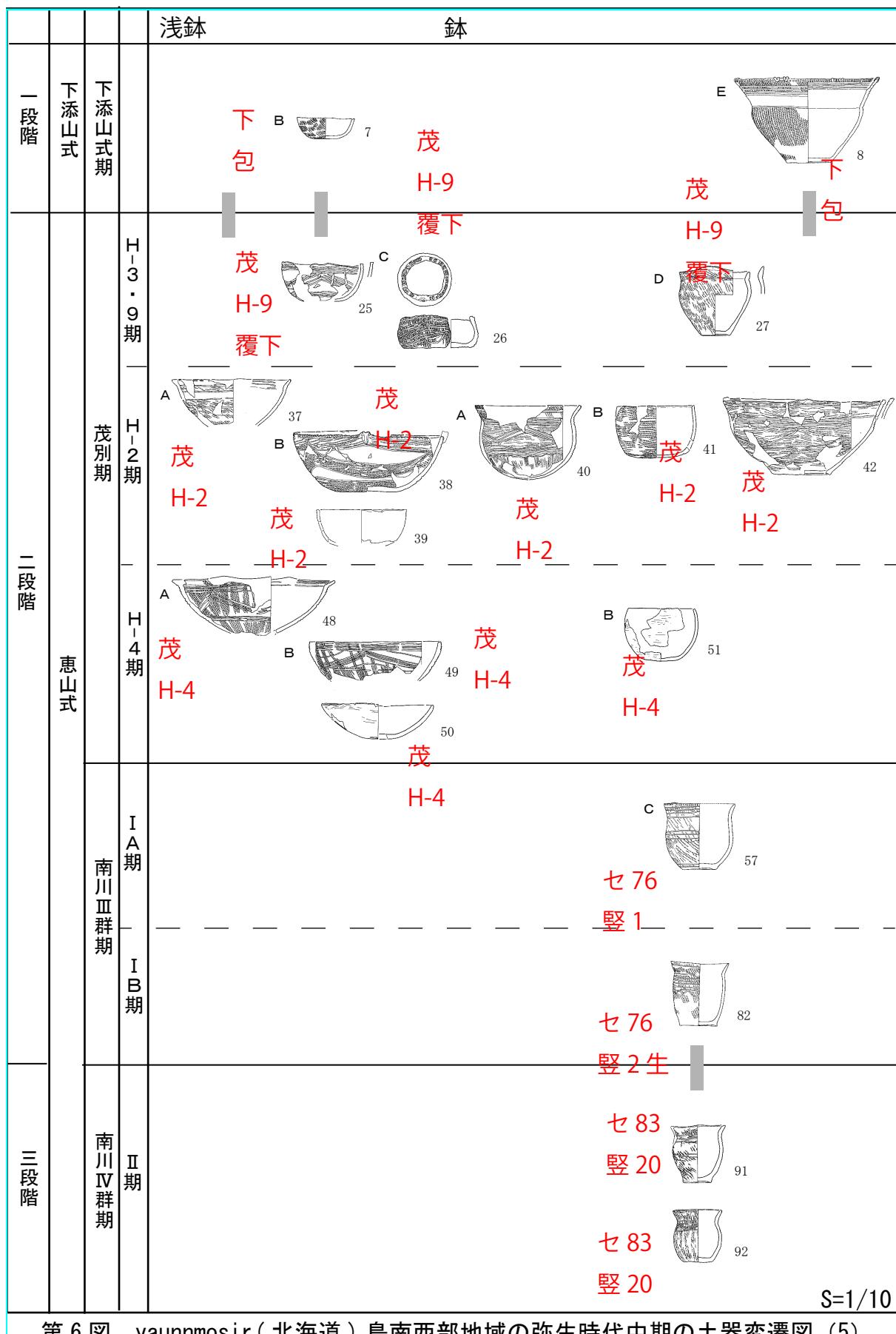
第3図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(2)



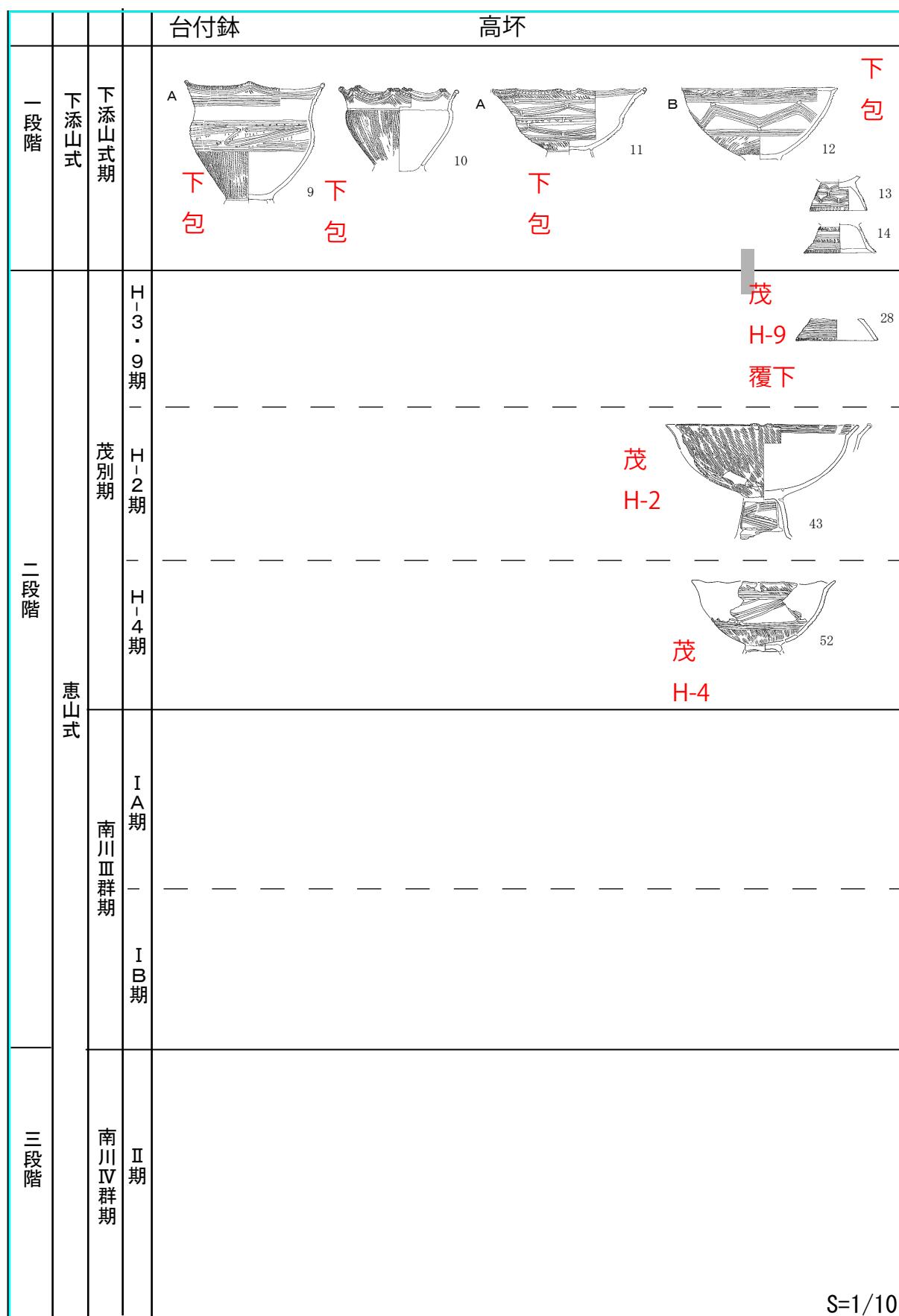
第4図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(3)



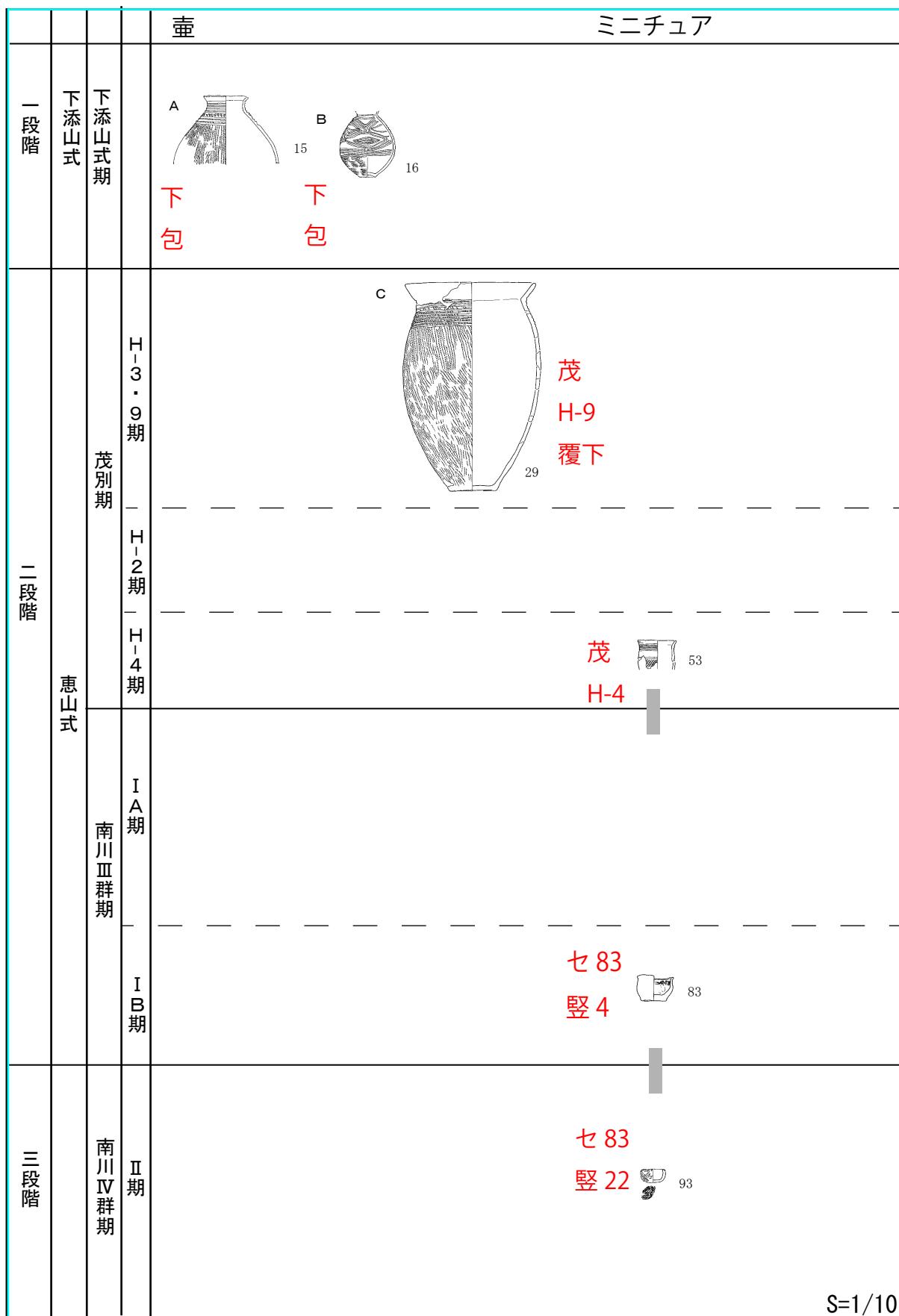
第5図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(4)



第6図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(5)



第7図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(6)



第8図 yaunnmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(7)

				甕 A 1	甕 A 2	甕 B	甕 C	甕 D	甕 E	甕 F	深 鉢 A	浅 鉢 A	浅 鉢 B	浅 鉢 C	鉢 A	鉢 B	鉢 C	鉢 D	鉢 E	台 付 鉢 A	高 坏 A	高 坏 B	壺 A	壺 B	壺 C	ミニ チュ ア	
一段階	下添山式期	H-3-9期																									
二段階	惠山式	茂別期	H-1-2期																								
			H-1-4期																								
			I A期																								
		南川Ⅲ群期	I B期																								
			II期																								
三段階		南川Ⅳ群期																									

第9図 細別器種の消長表

第Ⅱ部
情報交換 2

渡島・檜山地域の発掘調査

はこだてし おおふねびーいせき
函館市 大船B遺跡 (登載番号 B-01-247)

所 在 地：函館市大船町435-3ほか

発掘原因：国道278号函館市尾札部道路建設工事

発掘面積：4,094m² (III層), 2,319m² (V層)

発掘期間：令和3年5月7日～令和3年12月8日

調査主体：函館市教育委員会

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担当者：函館市教育委員会 福田 裕二, 小林 貢

調査者：(一財)道南歴史文化振興財団 萩野 幸男 (調査担当者), 三上 英則, 高橋 昇

調査の概要

大船B遺跡は、函館市大船町に所在する入美川左岸と大船村上川右岸との間、標高約40～45mの海岸段丘に位置している。調査区北西端に位置する大船村上川は現在、枯れ沢となっている。調査区中央からやや西側には駒ヶ岳a軽石層（昭和4年降下）で埋没した沢があり、この軽石層を除去すると礫層の広がりと多量の湧水が見られた。礫層からは近代と縄文時代の遺物が混在し、少量出土した。調査区北端から70mほどで急崖となり、海岸線までの距離は約200mである。同じ海岸段丘上には、調査区から200mほど南東の入美川左岸に大船D遺跡、北東400mほどに大船F遺跡が所在している（図1）。

調査は縄文時代前期以降の遺物包含層（III層）と、駒ヶ岳火山灰[Ko-f・g]（IV層）の下にある縄文時代早期の遺物包含層（V層）について実施した。試掘調査の結果、調査区北西側の一部ではV層の堆積がみられないこと、出土遺物は調査区南東側に限られることから、V層調査は埋没した沢の右岸について行った。また、調査の工程上、調査区を5分割し作業を行った（図2）。

III層調査

III層の調査は4,094m²について行った。検出した遺構は、竪穴建物跡41軒、竪穴状遺構2基、土坑152基、柱穴状土坑118基、落し穴3基、屋外炉8基、焼土13カ所、剥片集中12カ所、集石1カ所、焼骨片集中5カ所、獸魚骨を含む貝殻の小ブロック5カ所である。遺構は、埋没した沢の左岸南東緩斜面（調査区②・③の一部）と、入美川左岸の北東緩斜面（調査区①・④の南側）に集中している。竪穴建物跡の大半は重複し、一部は土坑とも重複して検出された。主体となる時期は後期初頭である。土坑は自然堆積で埋没するものと埋め戻しとみられるものがあるが、墓と断定できるような遺物等は出土していない。柱穴状土坑の多くは、調査区②の北側に集中している。剥片集中は全て珪質頁岩製で、石器製作跡や廃棄場所と推測される。貝殻の小ブロックは、岩礁性のタマキビを主体としている。

遺物は調査区のほぼ全域にみられた。土器は縄文中期（サイベ沢V・VI式・見晴町式）、後期（天祐寺式、涌元式、堂林式）、晩期（大洞式）、続縄文時代（恵山式）が出土している。主体となるのは後期初頭の天祐寺式・涌元式である。また調査区②南西端の沢部分からは、中期の一括土器（サイベ沢V式・VI式）や北海道式石冠などが多く出土した。石器類は石鏃や石槍、スクレイパーのほか、石斧、擦石や石皿などが出土した。遺物総数は約70,000点である。特徴的な遺物としては、青龍刀形石器や岩偶がある。

V層調査

V層の調査は2,319m²について行っている。検出した遺構は、土坑11基、柱穴状土坑12基である。遺物は調査区④を中心としてその東西に広がり、調査区①東端付近にも集中域が見られた。土器は（川汲式、ノダップI式、住吉町式、東鉋路IV式）、石器類は石鏃、スクレイパー、松原型石匙、トランシェ様石器、石斧、擦石、石錘、石皿など約1,200点が出土している。早期前葉の川汲式土器（日計式）は、縄文地に横位平行沈線文を施す破片の纏まりと、重層山形文などの押型文を主体とする纏まりが見られ、それぞれ数十片出土している。早期末の東鉋路IV式土器は、復元可能な数個体が出土している。また石製品としたなかに、円刃の石斧状を呈し頭部側に穿孔（穿孔部で欠損）されたものがある。

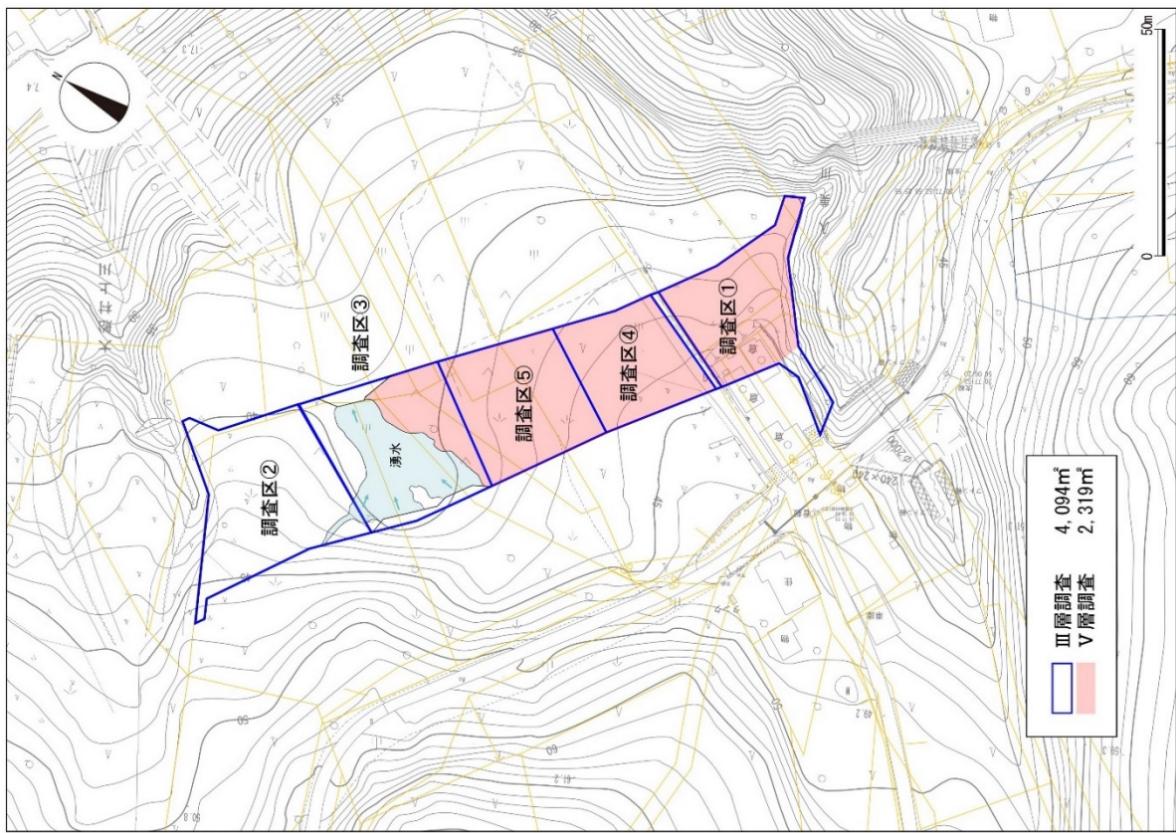


図2 調査区と周辺の地形

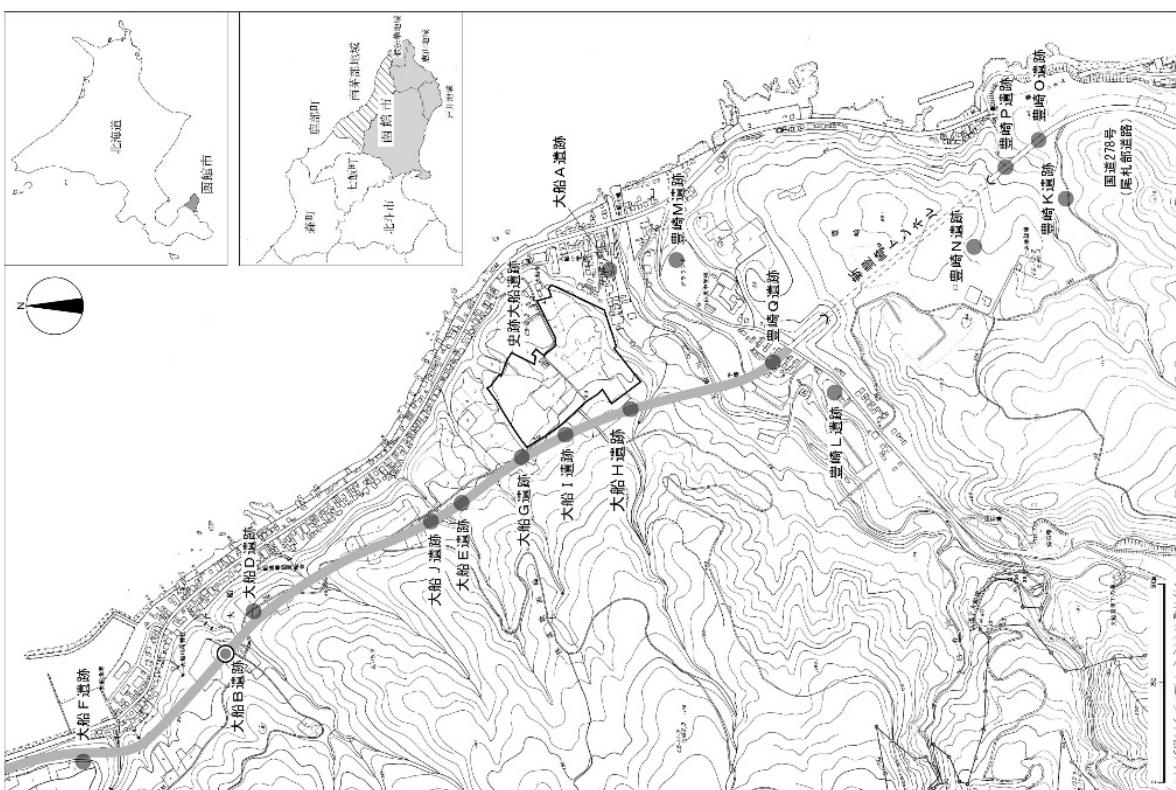


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲ層（おもに縄文時代中期～後期）の調査 1



調査開始前調査区全景（北上空から）



調査開始前全景（南東上空から）



調査区① Ⅲ層完掘（南東上空から）



調査区② Ⅲ層調査開始前（南東上空から）



調査区② Ⅲ層調査状況（南東上空から）

Ⅲ層（おもに縄文時代中期～後期）の調査2



竪穴建物跡 P D - 2 (縄文中期) 完掘



竪穴建物跡 P D - 3 (縄文後期) 完掘



竪穴建物跡 P D - 11 (縄文後期) 完掘



竪穴建物跡 P D - 14 (縄文後期) 完掘



竪穴建物跡 P D - 6 土器出土状況



竪穴建物跡 P D - 9 土器出土状況



竪穴建物跡 P D - 4 土器出土状況



土坑 P - 17 土層断面

Ⅲ層（おもに縄文時代中期～後期）の調査 3



土坑 P-22 土層断面



土坑 P-47 覆土土器（後期初頭）出土状況



落し穴 T P-2 完掘



縄文中期の一括土器や北海道式石冠など



調査区③作業風景



貝殻・獣魚骨の集中（SM-2）



青龍刀型石器出土状況



柱穴状土坑 P H-53 覆土岩偶出土状況

V層（縄文時代早期）の調査 1



調査区① 調査風景



調査区⑤ 調査風景



土坑（P-13）土層断面



東鉋路IV式土器出土状況



川汲式土器（押型文+沈線文）



川汲式土器（縄文+沈線文）



トランシェ様石器出土状況



石製品出土状況

はこだてし おおふねえふいせき
函館市 大船 F 遺跡 (登載番号 B-01-305)

所 在 地：函館市大船町394ほか

発掘原因：国道278号函館市尾札部道路建設工事

発掘面積：230m²

発掘期間：令和3年5月19日～令和3年6月30日

調査主体：函館市教育委員会

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担当者：函館市教育委員会 福田 裕二，小林 貢

調査者：(一財)道南歴史文化振興財団 黒沢 健明 (調査担当者)

調査の概要

大船F遺跡は、函館市大船町に所在する角張川左岸に沿って東西に細長く遺跡範囲が広がっている。今年度調査区はその東端にあたり、南は角張川、東は大船漁港を眼下に見下ろす急崖の上に立地した標高約48mの地点である。ここより北方向へは数百メートルに亘って海岸線に迫る急崖上の平坦面が続くが、周知の遺跡は所在しない。大小いくつかの沢を越えた南東400m程には大船B遺跡が所在する。

調査は縄文時代前期以降の遺物包含層（Ⅲ層）と、駒ヶ岳火山灰〔Ko-f・g〕（IV層）の下にある縄文時代早期の遺物包含層（V層）について実施した。

Ⅲ層調査

Ⅲ層の調査で検出した遺構は、竪穴建物跡1軒、竪穴状遺構1基、土坑2基、柱穴状土坑1基である。竪穴建物跡は調査区南側の角張川に面した縁辺部で検出され、斜面の自然崩落によって半分程を消失しているとみられる。遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。

遺物は約700点出土した。土器は後期初頭の天祐寺式が主体的に出土していることから、調査区内で検出された遺構も概ねその時期と考えられる。

V層調査

V層の調査で検出した遺構は、焼土3ヵ所、剥片集中2ヵ所である。V層の地形は山側から海側方向へと沢状の窪地が2条調査区内を横断しており、大小無数の礫が覆っている。角張川に面した縁辺部の一角で礫の分布が希薄な範囲があり、その周辺で剥片集中や土器のまとまりが確認されたが、人為的に礫を除けて空間を確保したものかは判然としない。沢状地形の窪地部分では厚く堆積したV層中から火山灰らしき薄層が確認され、南茅部地区ではこれまで確認されていない火山灰の可能性がある。

遺物は約1,300点出土した。土器は根崎式、中茶路式、東鉈路IV式などが出土し、復元可能な個体も複数あるものとみられる。石器は石鏸、つまみ付ナイフ、石斧、擦石、石皿などが出土している。無数の礫に覆われた沢状の地形や石皿と擦石が出土する様は豊崎Q遺跡で作業場的空間とした様相と類似する。



調査区全景（南側上空より）



V層完掘全景（東側より）

はこだてし うすじりしょうがっこういせき
函館市 白尻小学校遺跡 (登載番号 B-01-257)

所 在 地：函館市白尻町340-1ほか

発掘原因：白尻漁港臨港道路建設工事

発掘面積：1,093m² (III層), 671m² (V層)

発掘期間：令和3年7月1日～令和3年12月2日

調査主体：函館市教育委員会

調査実施：一般財団法人 道南歴史文化振興財団

担当者：函館市教育委員会 福田 裕二, 小林 貢

調査者：(一財)道南歴史文化振興財団 黒沢 健明 (調査担当者)

調査の概要

白尻小学校遺跡は、函館市白尻町に所在する白尻漁港西隣へと注ぐ無名小河川の上流、海岸線からの直線距離約300m、標高約30～35mの小河川左岸の海岸段丘上緩傾斜地に位置している。無名小河川は本調査区から上流部は現道下に埋没しているものとみられる。また、本調査区内で広範囲がコンクリートで覆われているが湧水地点が確認され、無名小河川との合流部にはかつて使用されていたコンクリート製の取水施設が設けられている。現在でもこの取水施設からは小河川を形成するに足る豊富な水が涌出している。

昭和44年に白尻小学校改築中にストーンサークルが発見・調査された場所は本調査区から約200m離れた標高約50mの現白尻小学校校舎のある地点で、そのさらに裏手の国道278号の通る標高約60～70mの地点が平成16・17・19年に調査されている。

III層とV層の概要を以下に記すが、この他に火山灰層であるIV層中でKo-fとKo-g間の腐植土層(IVb層)上面から縄文前期前半とみられる土器のまとまりを確認し、そのすぐ傍から剥片集中を1ヵ所確認している。

III層調査

III層の調査は1,093m²について行った。検出した遺構は、竪穴建物跡12軒、竪穴状遺構1基、土坑38基、焼土7ヵ所、剥片集中1ヵ所である。竪穴建物跡は中期後半が2軒、後期前葉が1軒、晩期が1軒で他は後期中葉とみられる。各期を通じて湧水地点を囲むように山側の標高の高い地点に分布するものとみられる。土坑は晩期とみられる小土坑が多く、覆土内に大礫を埋めるタイプが目立つ。他に中期とみられる周溝を伴う土坑、後期とみられる隅丸長方形の土坑墓と考えられるものもある。

遺物は調査区のほぼ全域にみられるが、調査区北端の沢状に大きく窪む傾斜面で捨て場とみられる遺物廃棄域から多量に出土している。土器は縄文中期(サイベ沢V・VI式・大安在B式)、後期(トリサキ式、大津式、鯈渦式)、晩期(大洞C2式)が出土している。主体となるのは後期中葉の鯈渦式と晩期の大洞C2式で、遺物廃棄域からの出土もこの2型式が大半で特に晩期が極めて多く、特徴的なものとしては晩期の土偶が出土している。石器類は石鏸や石槍、スクレイパーのほか、石斧、擦切残片、石鋸、擦石や石皿などが出土した。遺物廃棄域からは剥片・細片の出土が多く、特徴的なものとしては有孔石の出土が目立つ。この他、遺物廃棄域からは獸魚骨や貝類の局所的な廃棄がみられ、保存状態はそれほど良くないが、ほ乳類では鹿とみられるものが確認され、貝類ではタマキビ類やムラサキインコとみられるものが主体的であった。これらの食糧残滓とみられるものの中からは骨製のかんざしや鯨類の椎間板も出土している。この椎間板には2つの穴が開いており、仮面的な製品である可能性もある。遺物総数は約80,000点である。

V層調査

V層の調査は山側の標高の高い範囲を中心に671m²について行った。検出した遺構は焼土6ヵ所、剥片集中2ヵ所である。

遺物は約3,500点出土し、標高の高い平坦面で多い。土器はムシリI式や東鉢路IV式が出土している。石器は石鏃、スクレイパーのほか、石錘、擦石、石皿などが出土している。擦石と石皿は北側の平坦面で近接して出土する傾向がみられた。

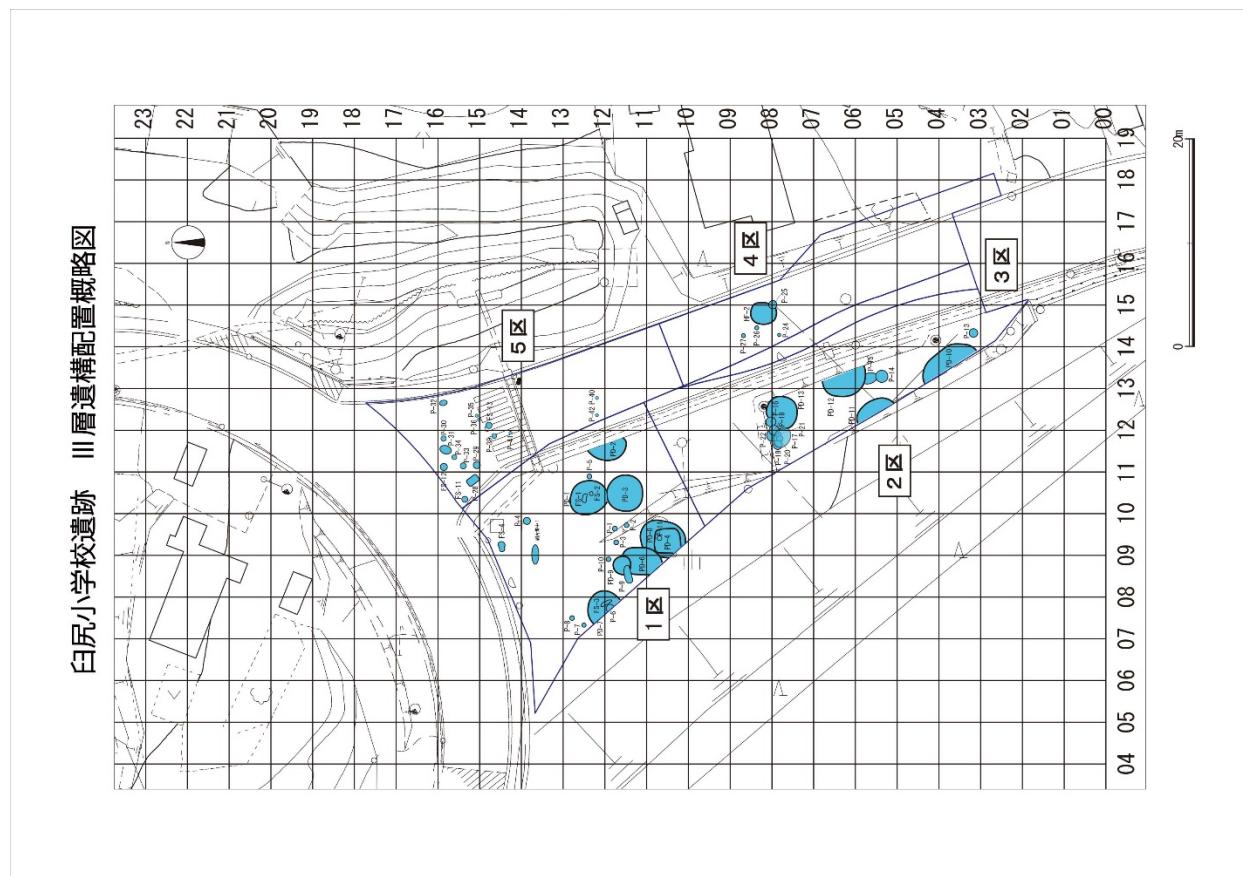


図1 III層遺構配置概略

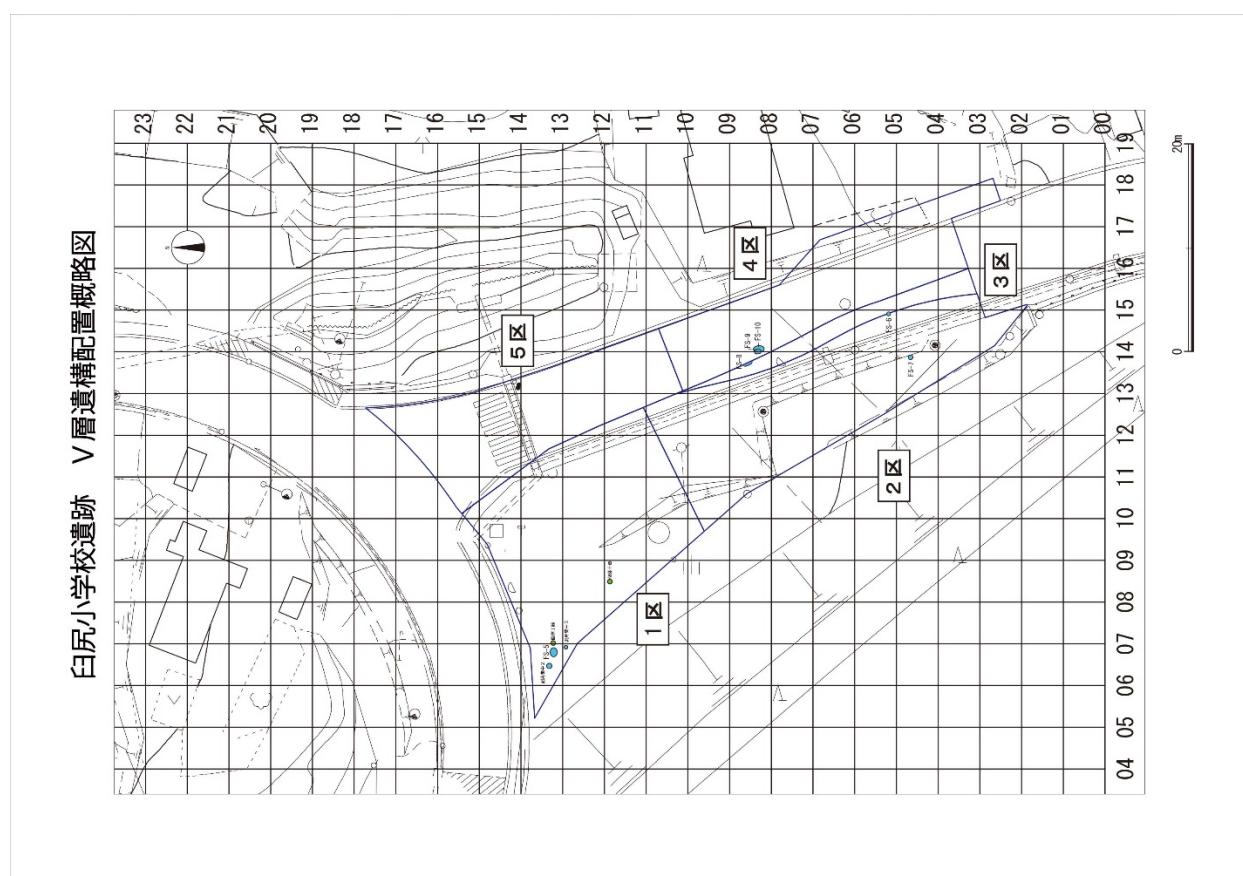


図2 V層遺構配置概略



調査区遠景（北西から）



1区III層完掘状況（東から）



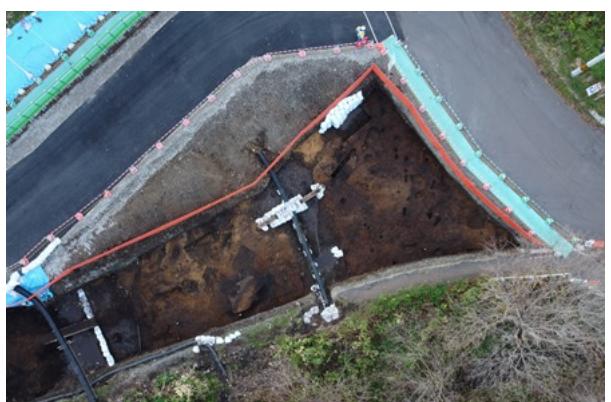
2区III層完掘状況（北東から）



3区III層完掘状況（南から）



4区III層完掘状況（東から）



5区III層完掘状況（東から）



1区III層鯨椎間板検出状況



1区III層貝層断面



1区III層遺物出土状況①



1区III層遺物出土状況②



1区III層遺物出土状況③



5区IVb層土器出土状況



5区IVb層剥片集中検出状況



1区V層完掘状況（南東から）



2区V層完掘状況（北から）



F S - 5 検出状況（1区V層）

上ノ国町 史跡上之国館跡のうち洲崎館跡 (C-02-25)

調査理由 遺構内容確認

調査地 檜山郡上ノ国町字北村地内

調査主体 上ノ国町教育委員会

調査期間 令和3年5月17日～11月2日

調査面積 300 m²

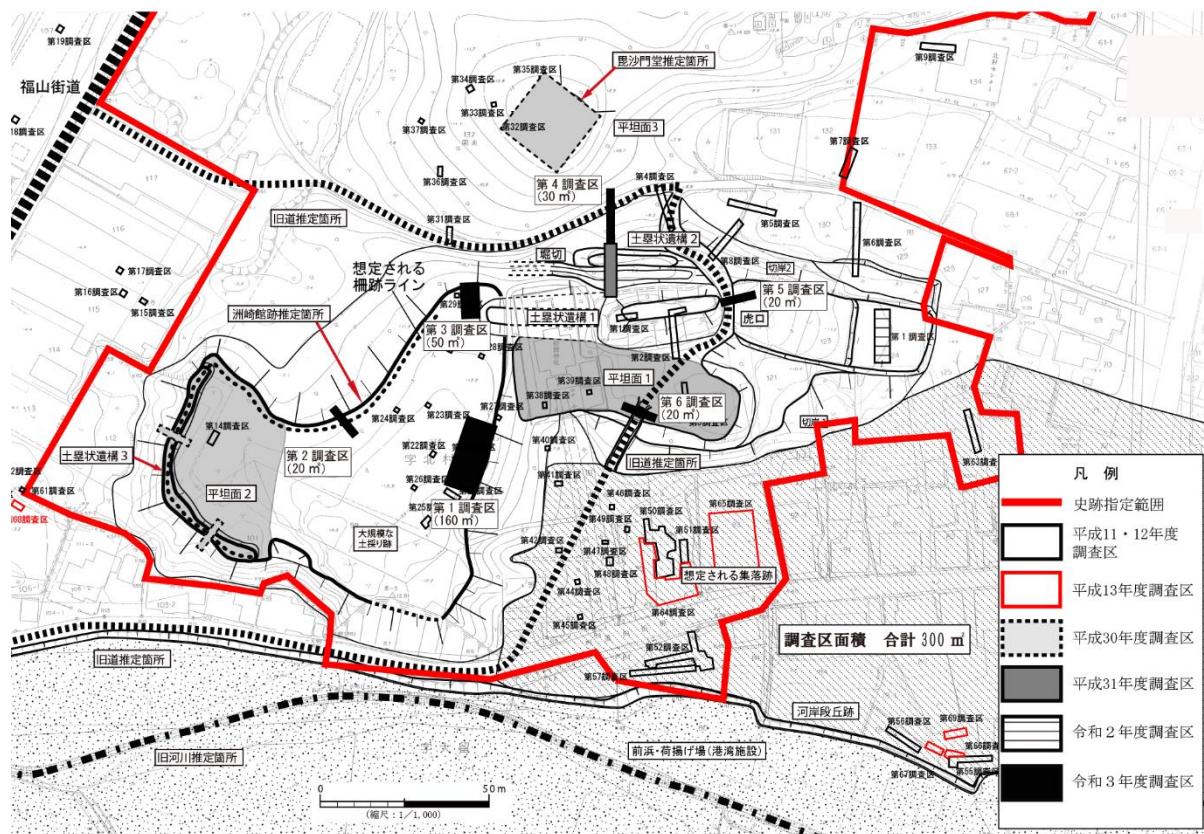
(1) 洲崎館跡の概要

洲崎館跡は、天の川河口から北に約1kmの日本海に面した標高5～10m前後の砂丘平坦面上に位置し、長禄元年（1457）のアイヌとの戦いで功績を挙げ、季繁の娘婿となった武田信広が天ノ川河口右岸に築いた中世城館である。

寛正3年（1462）に毘沙門金像を納めた毘沙門堂を建立されるが、安永7年（1778）の火災で本殿・拝殿ともに焼失し、松前藩によって翌年再建されている。

昭和8年にはジフテリア、腸チフスなどの蔓延により、砂館神社参道西側の平坦面に隔離病舎（木造トタン葺平屋46坪）を建設している。昭和36年（1961）に砂館神社の南西側の町道沿いから、開元通寶や永楽通寶を含む銅錢約2,500枚が採集され、青磁・白磁なども出土している。

また、同54年（1979）に神社東方120mほどの砂丘上の畠地から珠洲すり鉢（V期）を被った人頭骨が発見され、同58年（1983）には神社南西側の砂丘の砂取りによって地形が改変され、その際に大量の陶磁器と擦文土器が採集されている。



R3年度 洲崎館跡調査区位置図

平成 11～13 年度に行われた洲崎館跡の内外で分布調査では、掘立柱及び竪穴建物跡などの遺構の他、青磁・白磁・染付・古瀬戸・珠洲・越前・信楽焼の陶磁器や金属製品、アイヌが使用した骨角器などがみつかっているが、土壙や空堀といった館跡に特徴的な遺構が検出されておらず、縄張りについてはまだ十分な把握ができていない。出土する中世陶磁器の年代は、13 世紀後半～16 世紀初頭を示し、文献史料で示される築城年代より古い遺物が散見されている。

（2）主な調査成果

第 1 調査区－平坦面において、昭和 8 年頃の隔離病棟建設に伴う削平（右側平坦部）が確認された。中世の砂丘層から骨角器などが出土している。



近世以降遺物出土状況



中世面検出状況

第2調査区－未調査。

第3調査区－平坦面において、昭和8年頃の隔離病棟建設に伴う削平によって造成された平坦面が確認された。近世の掘立柱建物跡（柱間3.5尺）が確認された。中世の堆積層では、砂丘層が確認された。

遺物は、1640年降下の駒ヶ岳d火山灰（Ko-d）下から懸仏（毘沙門天）、中世陶磁器（青磁・珠洲）などが出土している。Ko-d火山灰上位からは近世陶磁器、瓦、寛永通寶などが出土している。



近世柱穴検出状況



懸仏出土状況

第4調査区-Ko-d 火山灰がレンズ状に堆積（右側箇所）して確認され、空堀の可能性が考えられる。



中世面検出状況



空堀状遺構検出状況

第5調査区—Ko-d 火山灰下から旧道跡と思われる壅みが確認されている。



旧道出土状況

第6調査区—Ko-d 火山灰下から旧道跡と思われる壅みが確認されている。



旧道出土状況

(2) 懸仏

昨年度に花沢館跡で発見された北海道初懸仏（如意輪觀音）に続き、毘沙門天の懸仏が出土している。

・毘沙門天像

毘沙門天は四方を守護する四天王のうち、北方を守護する「多聞天」である。単独で祀られる際に「毘沙門天」と呼ばれる。

- ・青銅製（高さ 8.2 cm × 幅 4.0 cm × 厚 1.0 cm）
- ・銅板を打ち出して作られる。鏡板に留めていたものが外れ、毘沙門天像だけ出土したと思われる。摩滅が激しいが、須弥山をイメージした岩座に立ち、左手の持物（じもつ）は欠損している。甲冑を表す刻み模様が施される。



表



裏



裏（斜め）



毘沙門天像 高さ 9.2 cm、南北朝～室町時代、『半蔵門ギャラリーHP』より転載)





毘沙門天像懸仏 14世紀、『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱ』國學院大学考古学資料館より転載)

(3) 瓦について

瓦については、若狭産の燻瓦、能登産の瓦が出土している（建築ヘリテージサロン渡辺一幸氏のご教示による）。毘沙門堂の瓦については、焼失後に本殿及び拝殿を再建した安永8年（1779）の翌年のご神体勧請の際の棟札に「瓦師」の名が記され、火事で焼失後に瓦を噴いたことが推測される。また、拝殿は文久2年（1862）に再建されている。



砂館神社棟札

第Ⅲ部
情報交換 3

渡島・檜山地域の考古学的調査

北斗市二股台場における新政府軍陣地

箱館戦争戦跡調査プロジェクト 石井淳平

2021年12月4日

概要

明治2年の箱館戦争に際して構築されたと伝えられる北斗市二股台場から二股川を挟んだ西側に新たな塹壕を確認した。この塹壕は二股台場に対面し、二股川へ下る道跡と組み合わせて機能したと考えられる。二股台場の北側尾根からの射撃に対抗して、これと対峙し牽制するための機能を有する新政府軍構築による塹壕跡と評価する。

1 はじめに

北海道の南西部、北斗市山中の台場山に、「二股台場」（北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地「台場山遺跡」(B-06-102)）として知られる塹壕群が残されている（河野 1924, 毛利 2012）。これらの塹壕は、明治2年（1869）の戦いで旧幕府軍が構築し、2度にわたる新政府軍の攻撃に耐えたことが知られている（大鳥ほか 1998）。本塹壕群の特徴は、長い射程と高い命中精度を有する施条銃の特性を活かし、正面射撃と側面射撃を組み合わせ、台場西側の平坦面に火力を集中的すべく構築されたものと評価した（石井ほか 2020）。

本調査では二股台場から二股川を挟んだ西側でこれまで知られていない塹壕を発見した。この塹壕を報告するとともに、可視領域の分析による構築意図を推測した。

2 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

2.1 明治2年箱館戦争

明治2年4月9日、旧幕府軍に占領された蝦夷地奪還のため、新政府軍は北海道南西部の乙部に上陸した。新政府軍の攻撃軸は松前口、二股口、安野呂口の3本が設定され、南蝦夷地の要衝である江差、松前を経て箱館へ至る松前口とそこから分岐した木古内口に最大の兵力が割かれた（大鳥ほか 前掲）。二股口は松前口に次ぐ兵力が派遣された（図1）。二股口は険しい山道の進軍を余儀なくされるが、強固な防御拠点もなく、兵力に乏しい旧幕府軍兵力の分断と各個撃破を図ったものと考えられる。

2.2 二股台場の位置

二股台場は北斗市大野町市街地から北西約10km上流の大野川左岸、大野川とその支流である二股川の合流点付近に位置する（図2）。大野市街地から二股川付近までは大野川に沿って平坦な地形が続くが、二股台場塹壕群の所在する尾根を境に、これより上流では尾根と谷が交互に現れる急峻な地形となる。

二股台場塹壕群は標高261mの台場山と、これと一連の尾根をなす339m峰との間の尾根上に確認され

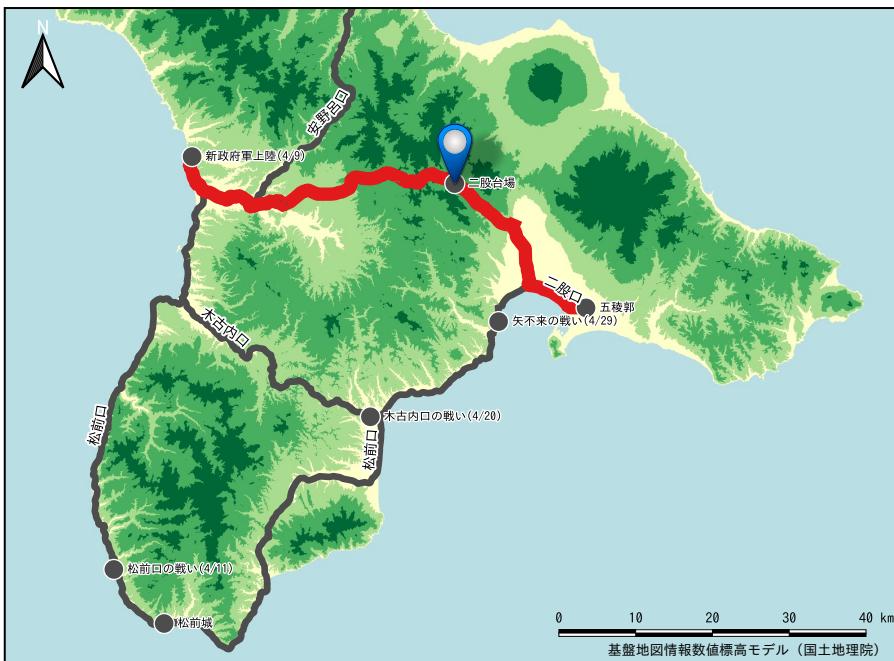


図1 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

ており、二股川と並行して北方から大野川にむかって傾斜する尾根上に配置される。最高地点に立地する塹壕は標高約330m、最低地点に立地する塹壕は標高約200mである。尾根の鞍部を旧道「鶴山道」が横切っており、塹壕群は鞍部をはさんだ南北の尾根に構築される。

3 新政府軍塹壕

新たに検出したS01は二股川に面した西岸に位置する。東側は急傾斜となっており、二股川へ直下することは困難である。二股川へ下る道筋は複数存在したと考えられるが、S01東側には旧道と思われる道跡があり、つづら折れに二股川へ下る（図3）。S01はこの旧道に接した西側に位置する（図4）。

塹壕は2本認められ、二股川に近い下位塹壕で長さ約10m、二股川から遠い上位塹壕で長さ約25mである（図5）。塹壕の深さは深いところで約1.8mである。

4 S01の可視領域

S01の可視領域¹⁾は二股台場の塹壕群の所在する台場山尾根の大半を含み、ほぼすべての塹壕を視界に捉えることが可能である（図6）。逆に言うと、S01は二股台場のあらゆる塹壕から攻撃目標となり得る地点である。特に鶴山道北側に位置するF08、F09、F10、F11はいずれも平面距離で300m以内であることから、相互に脅威となる位置関係である。

1) 可視領域の算出にはGRASS GIS versin7.8.2のr.viewshedコマンドを利用した。

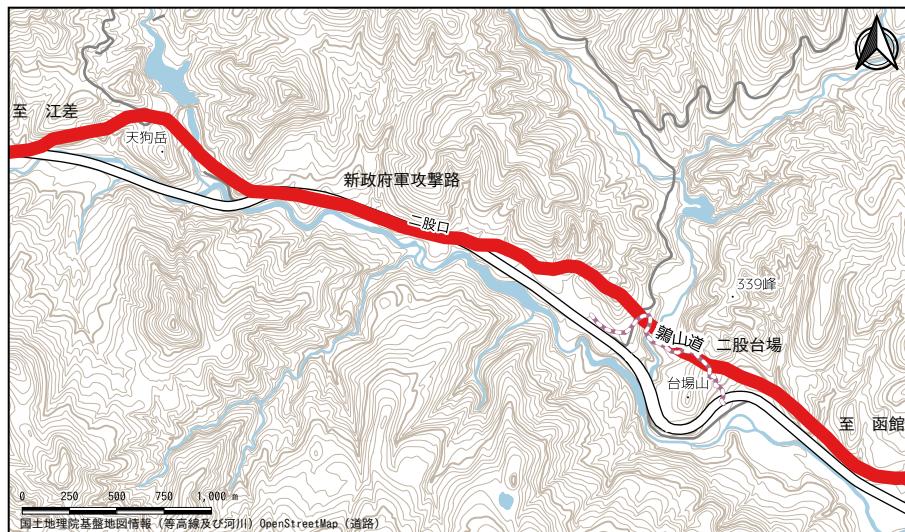


図2 二股台場周辺の地形



図3 S01 東側の通路（写真奥が二股川上流方向）



図4 S01 上位塹壕全景（南から）

5 考察

5.1 S01 の選地とその意味

二股川は両岸が切り立った崖となっており、とくに大野川に近い下流側は深い渓谷である。川底への降下、渡渉、対岸の崖上に上がるまでのいずれの行程も急傾斜の降下、登坂を余儀なくされる。一方、上流側は比較的緩やかであることから、渡渉地点は鶴山道より北側が選定された可能性が高い。S01はこうした渡渉地点へ向かう通路に配置されている。無防備となる二股川渡渉に際して、一時的な退避場とすることや対岸の二股台場に対して牽制射撃を行うことが目的と考えられる（図7）。

次に、渡渉した部隊が強力な十字砲火によって孤立・殲滅することを防ぐため、二股台場に対抗して援護射撃を行い、二股台場側の目標を分散させる狙いもあったと推測する。S01は二股台場のほとんどすべての塹壕を射角に入れていることから、必要に応じて援護射撃を行い、二股台場側の攻撃をS01に引きつけることで、二股川東岸への渡渉を果たした新政府部隊への集中砲火を緩和する機能を有していたと推測

する。二股川対岸の S01 からの射撃によって、渡渉部隊に向けるべき二股台場側の火力の一部を S01 に振り向けることを強要したと推測する。

5.2 結論

二股台場をめぐる攻防戦では小銃が主兵器として用いられた。旧幕府軍ではミニエー銃弾を使用する前装式施条銃、新政府軍ではこれに加えて後装式施条銃が用いられた。これらの施条銃の銃撃開始距離は「300 メートル弱から 500 メートルくらい」とされ（保谷 2007: 215）、滑腔銃に比較して、射程距離と命中精度が大幅に向上し、散開戦闘が歩兵部隊の基礎的な戦術様式となった（保谷 2013）。二股台場はこうした施条銃の性質を活かし、渡渉した新政府軍部隊を段丘上の平坦面で効果的に制圧する防御戦を構想していたことはすでに指摘したとおりである（石井ほか 前掲）。一方、新政府軍においても、一方的な集中砲火を軽減するために、二股川対岸や側面から牽制射撃を繰り返したものと考えられる²⁾。

本調査で確認した二股川西岸の S01 は、新政府軍が二股川を渡渉する部隊を援護するとともに、二股川東岸に着岸した新政府軍部隊に集中する銃撃を緩和するため、あえて二股台場の各塹壕の射角内に構築し、牽制射撃を行うと同時に二股台場からの攻撃を引きつけ、目標を分散させる意図があったと読み解きたい。

引用文献

- 石井淳平・野村祐一・塙田直哉・時田太一郎 2020 「北斗市二股台場の測量調査—箱館戦争戦跡の考古学的調査—」『北海道考古学』第 56 輯 pp.35-54
- 大鳥圭介 1998 「南柯紀行」『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社 pp.7-158
- 大野右仲 1995 「函館戦記」『新選組史料集』新人物往来社 pp.348-362
- 河野常吉 1924 『北海道史蹟名勝天然記念物調査』北海道立図書館所蔵,1974 年復刻版『北海道史蹟名勝天然記念物調査』名著出版 pp.88-91
- 保谷徹 2007 『戊辰戦争（戦争の日本史）』18 吉川弘文館
- 保谷徹 2013 「施条銃段階の軍事技術と戊辰戦争」 箱石大編『戊辰戦争の史料学』 勉誠出版 pp.61-87
- 毛利 剛 2012 『二股口台場』自遊出版工房

2) 『函館戦記』（大野右仲）では二股川の下流を回り込み、側面から二股台場を攻撃しようとした新政府軍が下流側にも旧幕府軍の備え（塹壕の配置）があったことを知り驚くとの記述がある。正面から突破が困難な二股台場に対して、側面からの攻撃により新政府軍正面への脅威を緩和しようと試みていたことがわかる。

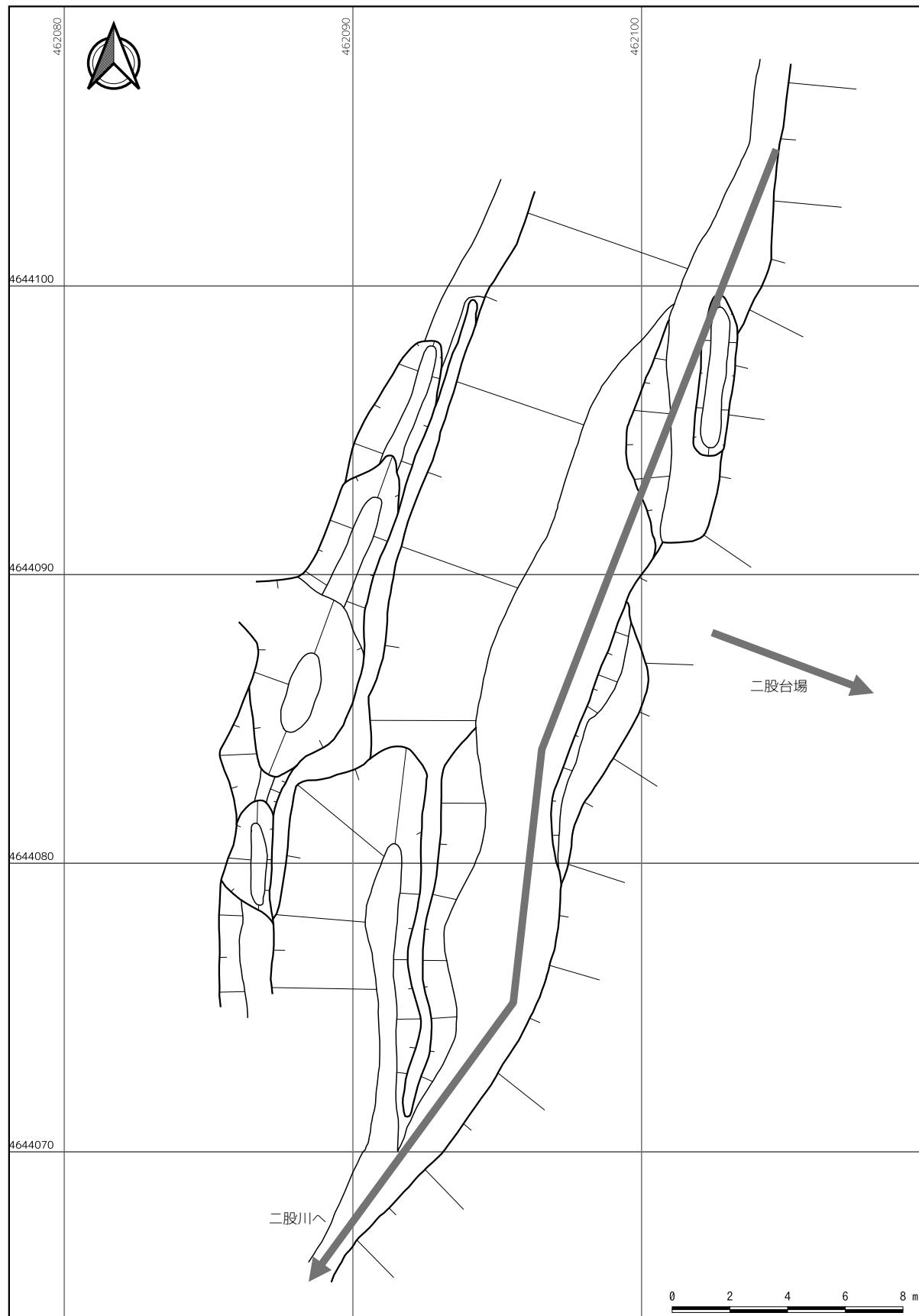


図5 S01 平面図

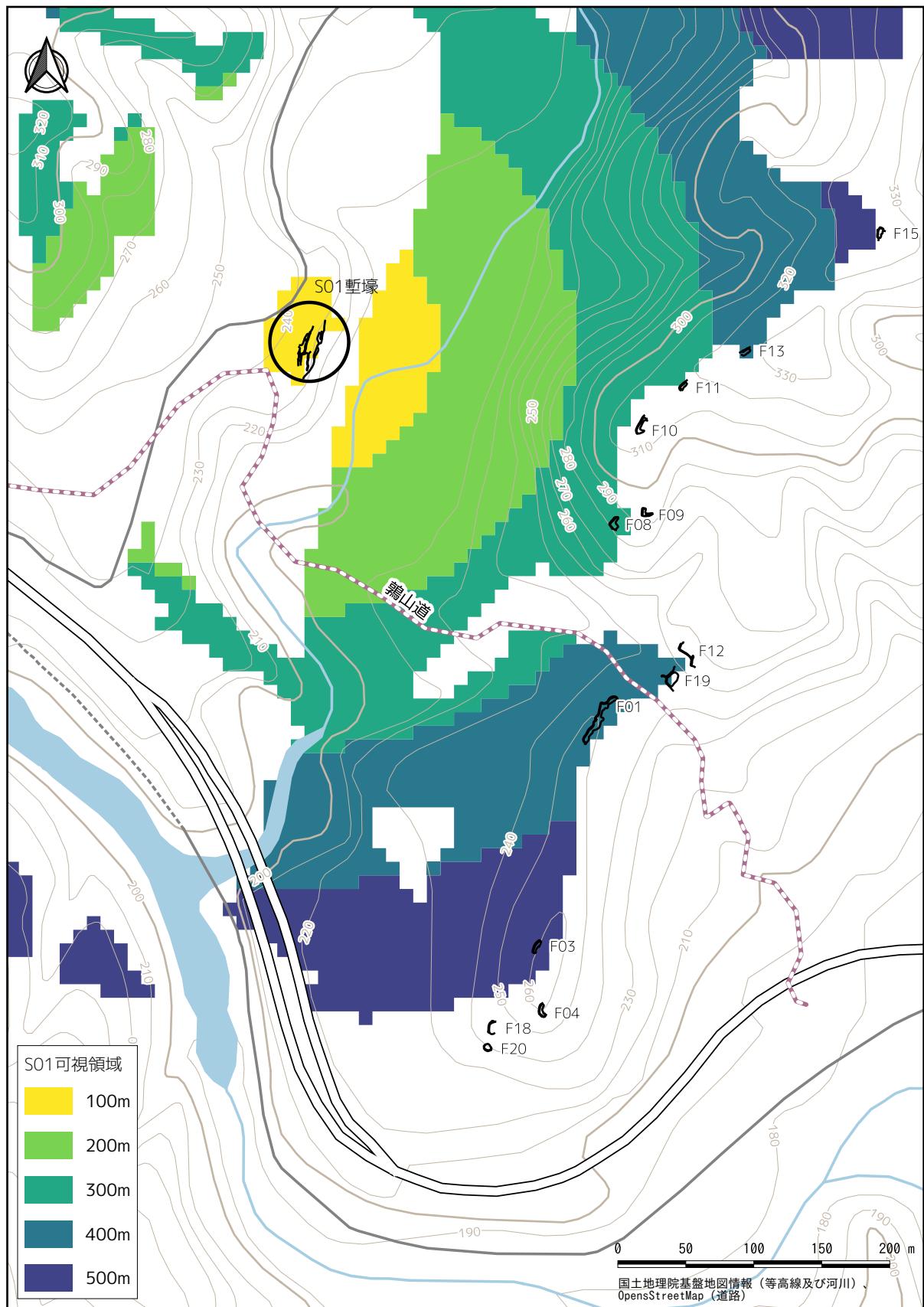


図 6 S01 可視領域

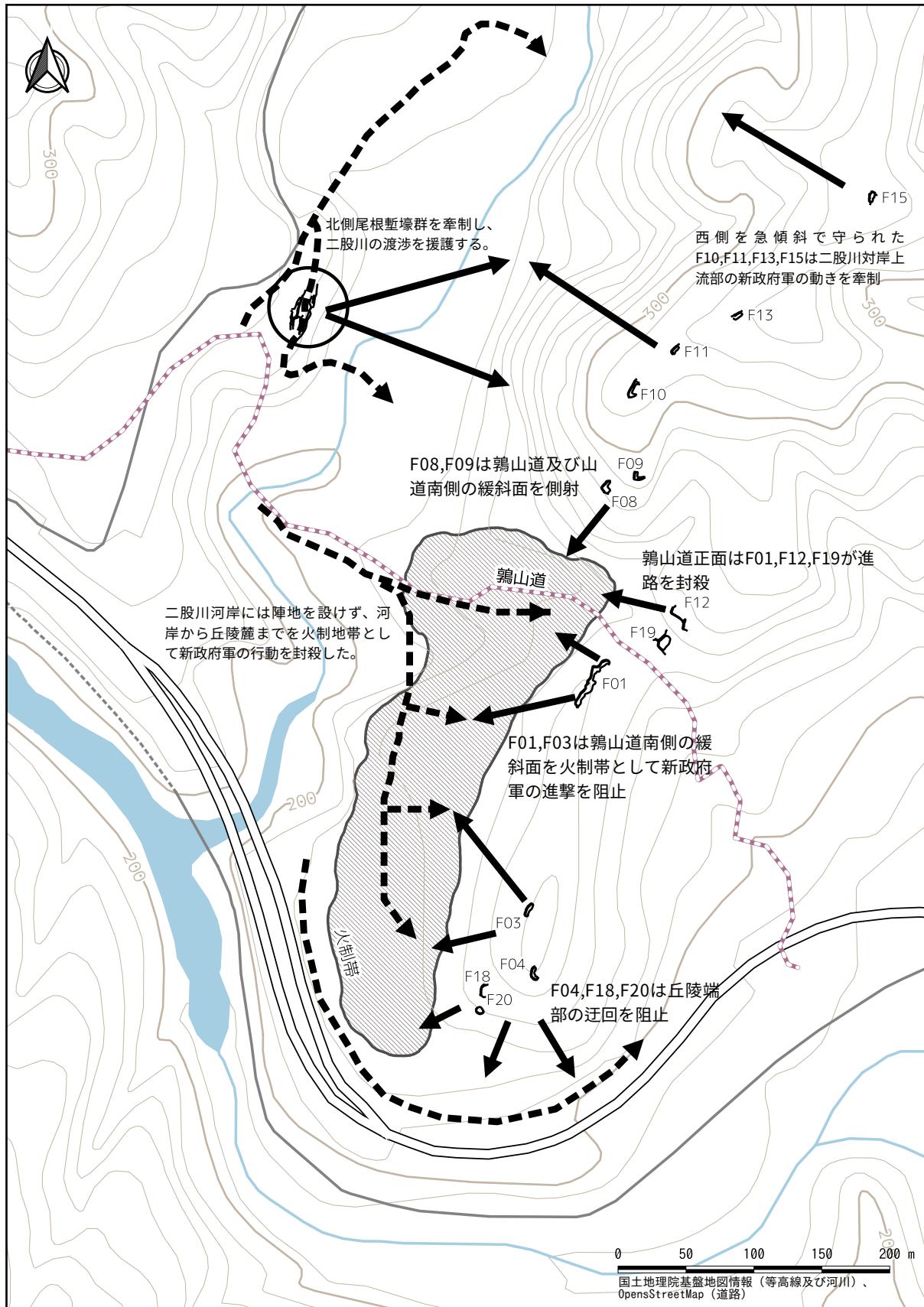


図 7 二股台場戦闘模式図

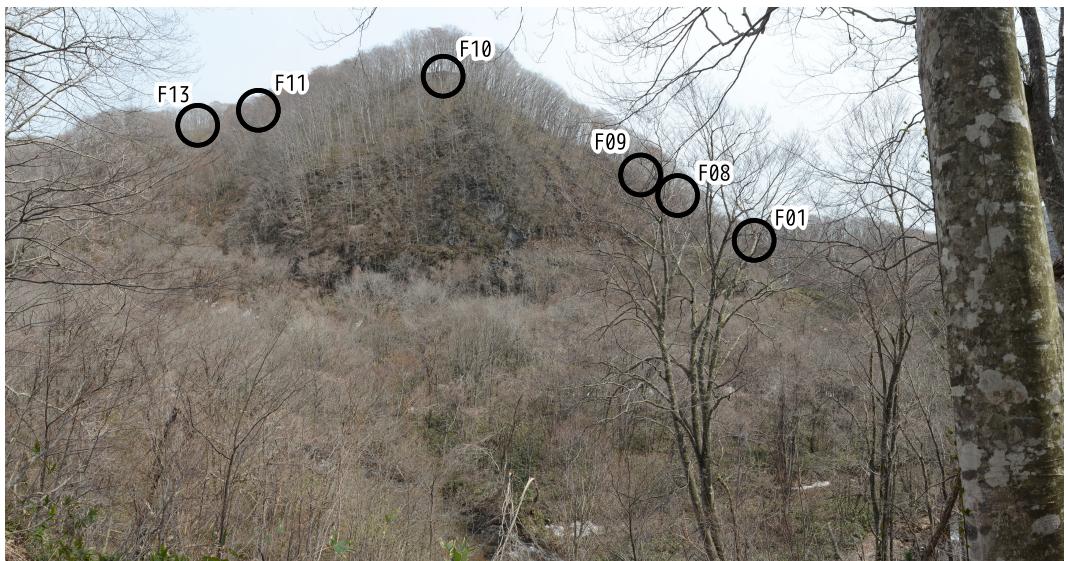


図 8 S01 から眺望する二股台場

史跡館城跡金属探査報告

あっさぶ文化遺産調査プロジェクト 石井淳平

2021年12月4日

概要

本調査は、史跡館城跡における礎石建物の配置区域において実施した金属探査である。当該区域は藩主居宅部分を含む館城の中枢的な建物群と推測され、過年度の調査では釘や鍵等の金属製品が出土している。

金属反応の分布は礎石建物の領域とよく一致し、藩主家族に仕える女性の活動空間周辺と藩主居室周辺、中～上級藩士らの日中の活動空間など、特定の空間に金属反応分布の集中が見られた。館城の主要建築物ともいえる奥御殿及び常御殿において優先的に建築・整備された空間領域が、金属反応の分布によって示唆されるものと結論づけた。

1 調査の概要

1.1 概要

期 間 2021年8月10日～8月14日、9月18日～9月19日

参加者 石井淳平、石井遼平（8月10～11日）、石井布由子（9月19日）

1.2 経緯

館城跡は史跡指定以前の昭和39年から延べ12次にわたる発掘調査が実施されてきた（大場1969; 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989; 厚沢部町教育委員会 1991, 2007, 2008, 2009, 2010, 2010, 2011, 2012, 2013）。平成21年に地表面確認による礎石の地点計測が行われ、3棟の礎石建物が検出された（厚沢部町教育委員会 2010）。

これらの調査成果を踏まえ、礎石建物が所在する区域の金属製遺物分布状況の把握を目的として、本探査を実施した。

2 史跡館城跡の位置と沿革

2.1 位置

館城は北海道南西部厚沢部町字城丘に所在する（図1）。厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差

は約 20m である。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約 30m の小丘陵である。

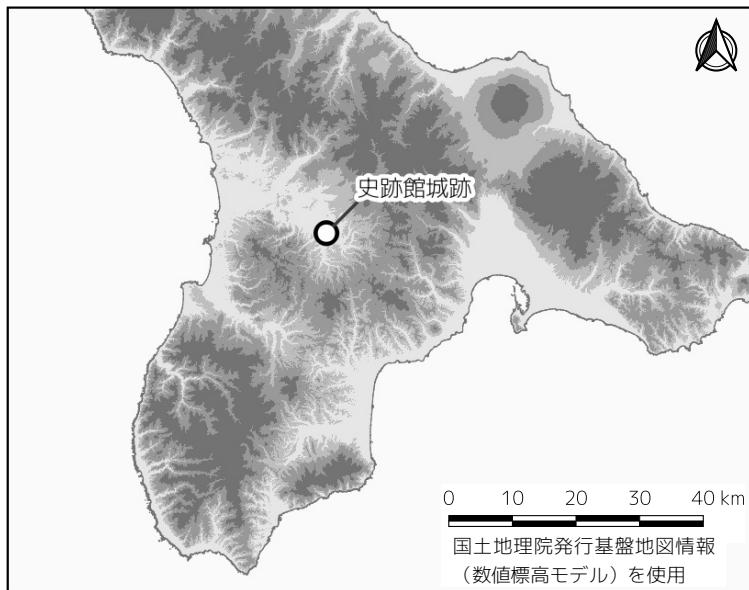


図 1 史跡館城跡の位置

2.2 沿革

館城は明治元年 9 月上旬に松前藩によって築城が開始された（江差町史編集室 1981）。築城工事は 10 月下旬頃に一時中断し、翌年の雪解けを待つ再開する見通しだったと考えられる。

しかし、同年 11 月 15 日に旧幕府軍一聯隊を率いる松岡四郎次郎の攻撃を受け館城は落城し（松前町史編集室 1974: 326）、以後再建されることなく現在に至る。明治 21 年に館村鷺の巣（現厚沢部町字富里）に入植した二木小児郎は、明治 21 年の館城の様子として、門柱の焼け跡や礎石が散乱する様子を書き残している（二木 1937: 45-46）。昭和初年頃に一部が農地化されたことを除いて開発行為が行われるず、今回調査を行った範囲についても礎石が良好に残存する。

3 調査の方法

金属探査に使用した機材はホビー用の金属探知機（商品名「GC-1072 Metal Detector」）である。事前のテストでは、ミニエー銃弾、硬貨（1 円、10 円、100 円）には距離 10cm 以内で的確に反応することを確かめた。

国土座標（世界測地系平面直角座標系 11 系）に準拠し¹⁾、探査範囲の南北方向に測線を設定した。測線に沿って金属探知機を移動しながら反応地点を検出した。複数回の走査で再現性のある反応を示す地点を反応地点として記録した。

1) 本調査で使用した測線は、白杵歟氏（札幌学院大学人文学部）が 2021 年 8 月 11 日から 12 日にかけて実施したレーダー探査等の測線を利用させていただいた。



図 2 金属探査実施状況

4 探査範囲

探査実施区域は、礎石建物が検出されている領域である（図3）。これらの礎石は、藩主の居所である奥御殿及び日中の居所である常御殿に相当する建物を構成すると考えられる。平成21年の調査ではこの区域から陶磁器のほか、釘や鎌などの建築資材、屏風の縁金具などが出土した（厚沢部町教育委員会 2010: 45-50）。

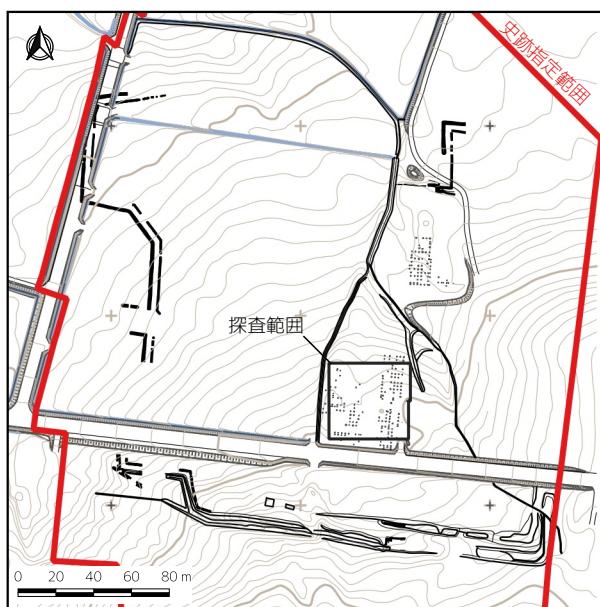
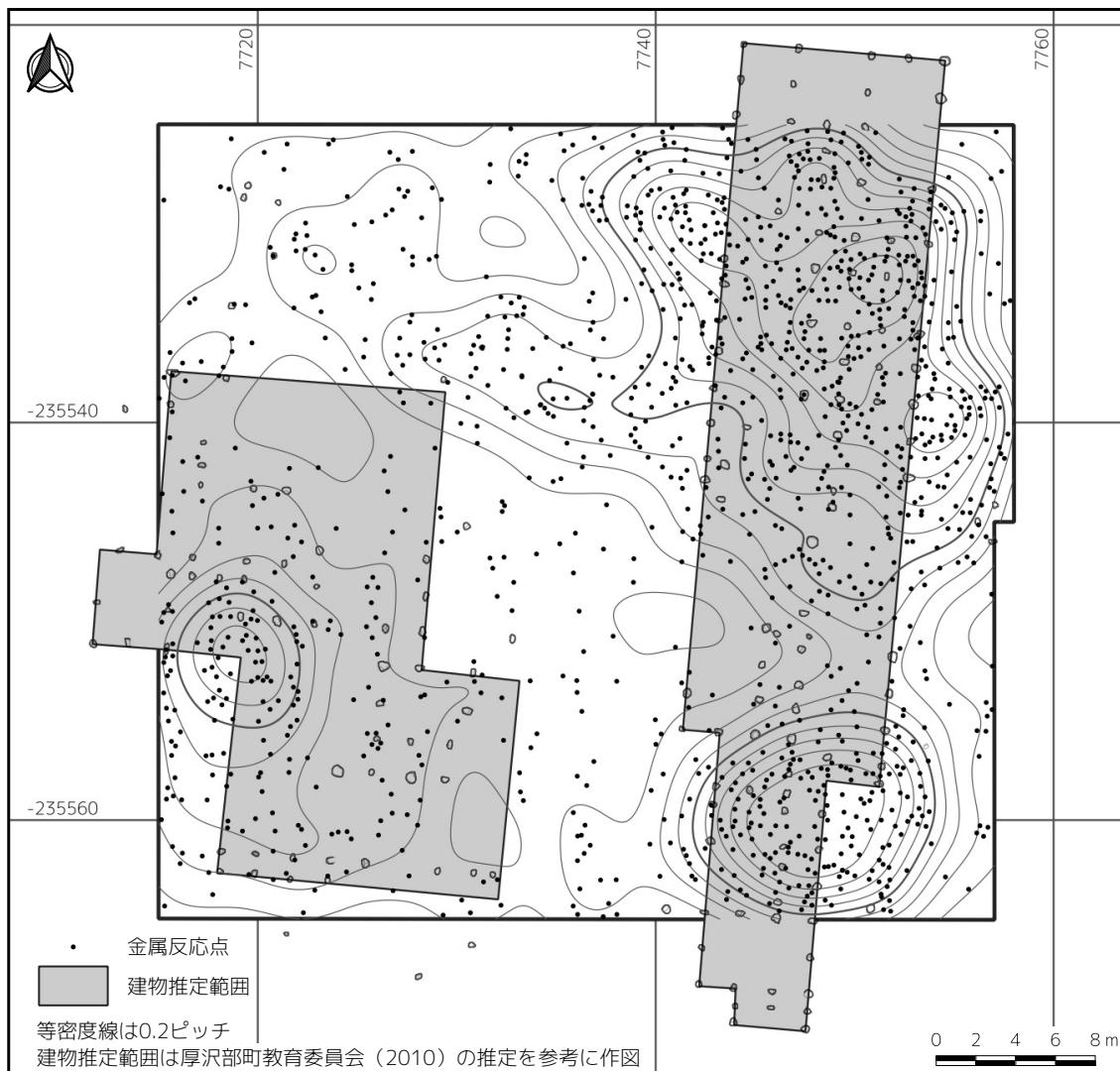


図 3 金属探査の範囲

5 探査の結果

5.1 金属反応の分布

調査区の北東部、南東部、南西部の3箇所に金属反応の集中域が確認できる²⁾(図4)。調査区には礎石の配置から2棟の建物が存在すると推定されており(厚沢部町教育委員会2010:69)、2つの建物に挟まれたx=7730～7740の領域は分布密度が低い。東側建物の南北に高密度の反応分布がある。平成21年度の礎石調査における出土遺物分布も東側建物に多く見られることから、過去の調査結果とも整合する反応分布である。



2) 金属反応のカーネル密度推定にはGRASS GIS version 7.8.2 のv.kernelコマンドを使用した。radius=7mである。作成した密度ラスターからr.contourコマンドにより、0.2ステップの等密度線を生成した。

5.2 金属反応のポイントパターン解析

金属反応の分布は図4のとおり明らかな集積傾向を示す。

ポイントの集積が偶然に生じるパターンではなく、分布が何らかの構造を反映し、関連をもつことを表現するのに利用されるのがK関数である。K関数により算出されるK統計量は、任意の金属反応の周辺に完全空間乱数（complete spatial randomness）と呼ばれる状況を生成し、当該完全空間乱数を生成する半径における理論的なK統計量と実測されるK統計量の差を比較し、実測値 > 理論値ならば、その半径距離内では、偶然とはみなせないポイントの集積が生じている可能性が高いと判断する。逆に実測値 < 理論値ならば、ポイントは他のポイントを避けるように分布する可能性が高いと判断する。完全空間乱数を発生させる半径を徐々に増加させることで、領域の面積に応じた空間集積の状況を明らかにすることができる。

図5のエンベローププロットは、金属反応分布における1000回のシミュレーションの上限値、下限値及び理論値と実測値を比較したものである³⁾。半径約1.5m以上で、実測値 > 理論値となっており、明確な空間集積が認められる。すなわち、何らかの要因（たとえば過去に存在した建築物）によって、偶然とは言えない金属反応の集中区域が存在することを示す。半径が10mを超えると分散傾向に転じ、半径約13m以上で実測値 < 理論値となり、空間的な分散傾向を示す。金属反応の分布が排他的であり、他の金属反応から離れて分布する傾向があることを意味する。すなわち、金属反応の分布が複数の集積からなることを裏付けるものといえる。

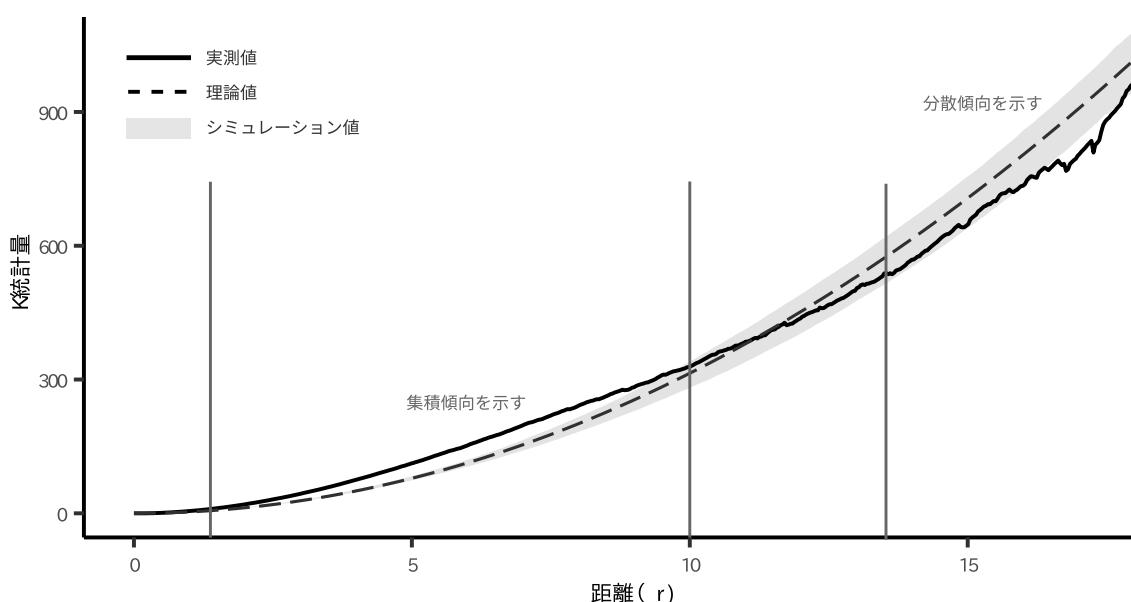


図5 金属反応分布のエンベローププロット

3) ポイントパターン解析にはオープンソースの統計解析環境 R version 4.1.1 を使用した。K統計量の算出及びシミュレーションは、R の空間解析パッケージである spatstat version 2.2 を使用した。エンベローププロットの作成は ggplot2 version 3.3.5 を使用した。

5.3 金属反応と建物

金属反応の集積は探査範囲北東部と南西部、南東部にみられる。北東部の集積は、『館築城圖』⁴⁾における「御末女中部屋」、「御乳御抱部屋」、「御次」など、藩主家族に仕える女性たちの空間に相当する。南東部の集積は「御寝所御居間」、「御仏間」、「内縁」など藩主の日常生活空間に相当する（図6）。同様に南西部の集積は「御近習頭」、「下御台子間」、「奥御納戸」など、中～上級藩士らが日中所在する空間に相当する。

金属反応の実態は、釘・鎌などの建築資材、什器類に付属する金具、刀子などの道具類と考えられる。その疎密は建物の完成度及び内部空間の整備度合いを反映するものと考えられる。

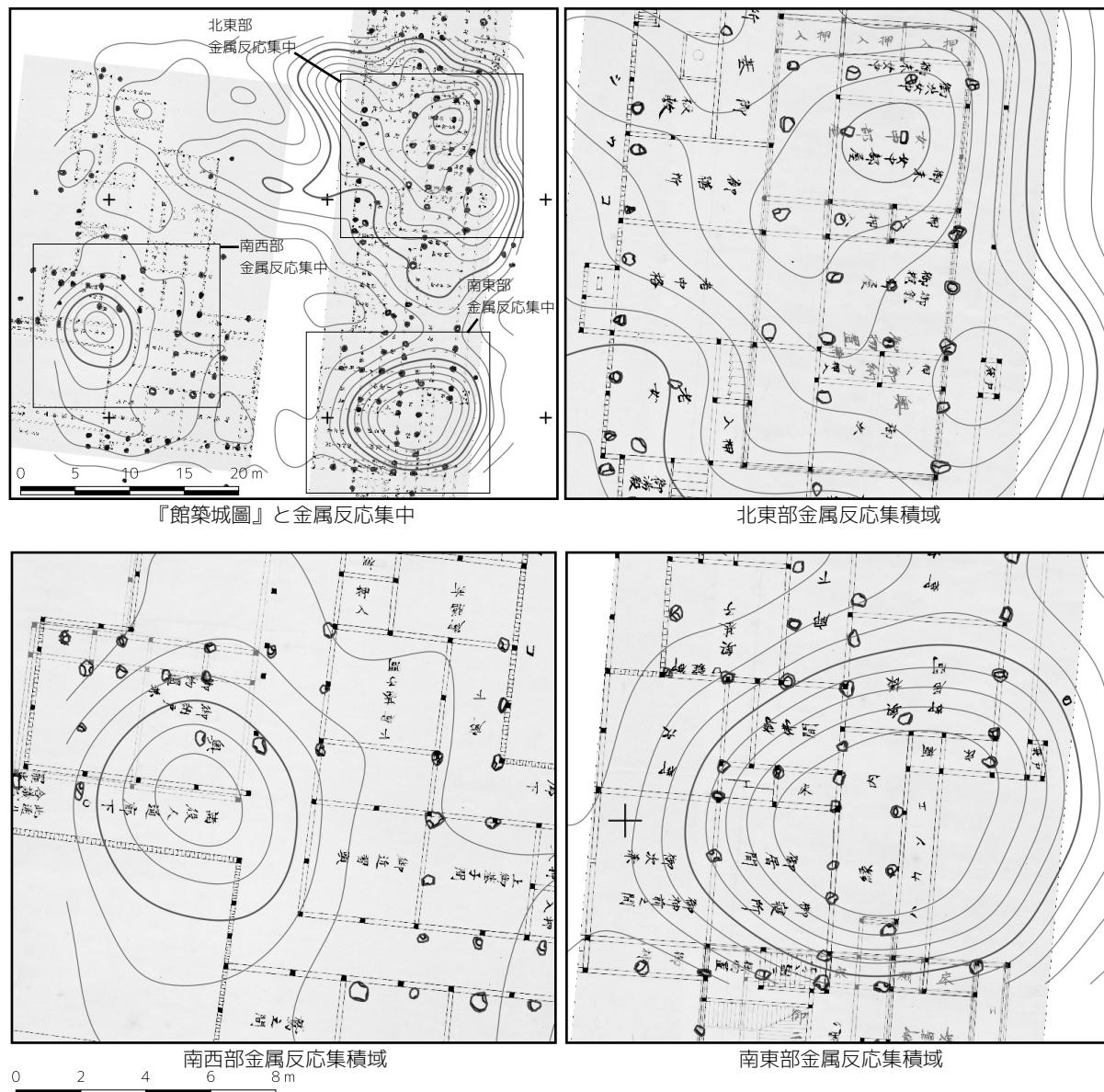


図6 金属反応分布と『館築城圖』

4) 『館築城圖』は江差の豪商増田家に残された文書類（増田家文書）に含まれる館城の奥御殿及び常御殿を描いたと思われる平面図である。2021年現在、原本は確認できず、厚沢部町郷土資料館所蔵の写本を使用した。描かれた平面図は、現地の礎石配置とは部分的に一致するが、図面全体として現地の礎石配置とは一致しない。

6 まとめ

本探査で検出した金属反応は以下の3種が混在するものと考えられる。

1. 金属探知機の誤反応
2. 館城落城後に持ち込まれた近代の金属遺物
3. 館城に伴う金属遺物

これらのうち、1.の誤反応については、反応地点の記録に際して反応の再現性を要件としたことから、その大半を除去できたものと考えている。2.の近代の残存金属については、観光客の投棄物や毎年行われる「館城跡祭」の特設舞台設置等に伴う残置金物などが考えられる。しかし、探査区域は直近30年間において年4~5回の草刈りを実施しており、その障害となる金属片については隨時史跡外に排出されている。すなわち、2.の影響についても限定的と考えられる。以上のことから、本探査において検出された金属反応の多くは3.館城築城に伴う遺物と判断する。

金属反応の集積は礎石建物の領域と合致し、館城築城時に持ち込まれた金属の集積実態を反映しているものと考えられる。藩主家族に仕える女性の活動空間周辺と藩主居室周辺、中～上級藩士らの日中の所在空間に高い集積がみられることは、これらの領域が館城築城において優先的に仕上げられ、什器類の搬入が行われたことを反映する可能性が高い。結論は今後の発掘調査の成果を待たねばならないが、本探査は館城の主要建築物である奥御殿及び常御殿において優先的に建築・整備された空間領域の存在を示唆するものと言えよう。

引用・参考文献

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城址 遺構確認調査報告書』
厚沢部町教育委員会 1991『館城址遺構・範囲確認調査-第2・3次調査報告書-』
厚沢部町教育委員会 2007『館城跡III 平成17・18年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書5)
厚沢部町教育委員会 2008『館城跡IV 平成19年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書6)
厚沢部町教育委員会 2009『館城跡V 平成20年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書7)
厚沢部町教育委員会 2010『館城跡VI 平成21年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書8)
厚沢部町教育委員会 2011『館城跡VII 平成22年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書9)
厚沢部町教育委員会 2012『館城跡VIII 平成23年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書10)
厚沢部町教育委員会 2013『館城跡IX 平成24年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』(厚沢部町教育委員会発掘調査報告書11)
江差町史編集室 1981『江差町史』4 資料4(関川家文書) 江差町 1220-1301
大場利夫 1969「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報』17(昭和39年度) 174
二木小児郎 1937『福寿草 二木小児郎自叙伝』 厚沢部町教育研究会社会科サークル 2003 復刻版参照
松前町市編集室 1974「戦争御届出書」『松前町史(史料編)』第1巻 松前町 317-343

第42回南北海道考古学情報交換会発表資料集

2021年12月4日発行

発行 南北海道考古学情報交換会
